

連想照応の諸問題
— Problèmes de l'anaphore associative —

1. 連想照応では何か問題となるか

— **Survol des problèmes que soulève l'anaphore associative**

(1) 連想照応とは典型的には次のような照応過程をさす。イタリック体が「先行詞」(antécédent)、ボールド体が「照応詞」(anaphore)である。

a. Il s'abrita sous *un vieux tilleul*. **Le tronc** était tout craquelé. (Fradin 1984)

彼は菩提樹の古木の下に避難した。(その)幹は一面ひび割れていた。

b. J'ai acheté *un stylo*, mais j'ai déjà tordu **la plume**. (Ibid.)

私は万年筆を買ったが、もうペン先を傷めてしまった。

c. Nous arrivâmes dans *un village*. **L'église** était située sur une hauteur (Kleiber 1992)

私たちはとある村に到着した。教会は小高い丘の上にあった。

(2) 通常の照応過程は次のようなものである。

a. 人称代名詞、指示代名詞照応

Un garçon entra dans la salle d'attente. **Il** s'assit à côté d'une vieille dame.

待合室に少年が入って来た。彼は年配のご婦人の隣に座った。

b. 定冠詞付き名詞 (le N)を用いた忠実照応

Il était une fois *un prince* très malheureux malgré son beau château. **Le prince** ne pouvait pas avoir de fils. (Corblin 1983)

昔々ある所に王子様がいました。王子様は立派なお城に住んでいるのにとっても不幸せでした。王子様には男の子が生まれなかったのです。

c. 指示形容詞付き名詞 (ce N)を用いた忠実照応

Paul a croisé *une blonde* sur le quai de la station de la Porte d'Orléans. Il avait vu **cette blonde** chez un ami.

ポールはポルト・ドルレアンの地下鉄駅のホームでブロンドの女性とすれちがった。彼はこのブロンド女性を、とある友人の家で見かけたことがあった。

d. 定冠詞付き名詞 (le N)を用いた非忠実照応

J'ai rencontré *un chien*. **L'animal** m'a suivi. (Theissen 1998)

私は犬に出会った。その動物は私の後を付いて来た。

e. 指示形容詞付き名詞 (ce N)を用いた非忠実照応

Un arbre dressait ses branches tordues non loin de là. Il décida de passer la nuit près de **ce compagnon**. (Corblin 1987)

ほど近くに一本の木がねじ曲がった枝を広げていた。彼はこの旅の友のそばで(この木を旅の友として)一夜を過ごすことにした。

関係は、全体一部分、ステレオタイプ、認知フレーム、シナリオなどとして捉えることができる。連想照応を狭く限定する立場。cf. Azoulay, Fradin, Kleiber, Corblin, etc.

(B) テクスト言語学者の立場 (discursivo-cognitif 派)

連想照応は2つの名詞句の関係に基づくものではなく、談話の文脈が作り出すものである。照応詞が「定」であることの源泉は先行詞にあるのではなく、談話文脈全体が関わっている。連想照応を広く捉える立場。cf. Charolles, Berrendonner, Reichler-Béguelin, etc.

問題となる例文：

a. Sophie dormait, **le journal** était tombé au pied du lit, **le cendrier** était plein à bord.

(Charolles 1990)

ソフィーは眠っていた。新聞はベッドの足下に落ちており、灰皿は縁まで一杯になっていた。

b. Sophie dormait, **l'avion** survolait l'Océan Indien. (Ibid.)

ソフィーは眠っていた。飛行機はインド洋の上空を飛んでいた。

(5) 文法学者の見解

この例文には先行詞に当たるものがない。確かに次のような例では先行詞がなくても連想照応と認めることができる。それは *couper du pain* 「パンを切る」というステレオタイプ化されたフレームに *le couteau* が含まれるからである。*creuser* 「穴を掘る」と *la pelle* 「シャベル」も同様である。

c. Pierre a coupé du pain, puis il a rangé **le couteau**. (Kleiber 2001)

ピエールはパンを切った。そしてナイフを片付けた。

d. Paul n'a pas creusé longtemps. **La pelle** s'est cassée tout de suite. (Ibid.)

ポールは長くは掘らなかった。シャベルがすぐに壊れた。

しかし *dormir* 「眠る」のフレームにベッドやシーツは含まれても、新聞や飛行機は含まれていない。よってこれは連想照応ではない。

(6) テクスト言語学者の見解

連想照応にとって適切な先行詞の有無は本質的な問題ではない。文脈が作り出す談話世界の中に自然に存在するものは広く連想照応と認められる。*Sophie dormait* 「ソフィーは眠っていた」が作り出す談話世界の中に「新聞」や「灰皿」があるのは自然である。またソフィーが眠っているのが飛行機の機内であることも自然に受け入れられる。

(7) 文法学者の見解の問題点

(A) 文法学者のように先行詞と照応詞の間のステレオタイプ化された連想関係(フレーム)があるものだけが連想照応だと定義すると、(4) a., (4) b. で *le journal*、*le cendrier*、*l'avion* にどうして定冠詞が付くのかを説明することができない。

(B) インフォーマントでテストをすると、連想照応の容認度にはかなり個人差が出る。インフォーマントのなかには「これが小説の一節だとすると容認できる」と答える人がいる(出口 2016: 66)。文法学者のように、先行詞と照応詞の間のステレオタイプ化された連想関係を基準として考えると、なぜ小説の一節だとすると容認度が上がるかを説明できな

い。

(8) テクスト言語学者の見解の問題点

テキスト言語学者のように、言語文脈が作り出す談話世界の中に自然にあると感じられるものはすべて連想照応だと考えると、いったいどこまでが連想照応なのかの境界線を引くことができなくなる。

a. *Sophie dormait, le journal était tombé au pied du lit, le cendrier était plein à bord.*

(Charolles 1990)

ソフィーは眠っていた。新聞はベッドの足下に落ちており、灰皿は縁まで一杯になっていた。

b. *Sophie dormait. La nuit gagnait l'horizon. Le silence recouvrait la campagne.* (Ibid.)

ソフィーは眠っていた。地平線まで夜の帳が降りていた。田舎は静けさに包まれていた。

Charolles は a. は連想照応だが、b. はそうではないという。この議論はわかりにくい。

【引用文献】

Charolles, M. (1990), "L'anaphore associative. Problèmes de delimitation", *Verbum* 13-3, 119-148.

Kleiber, G. (2001), *L'Anaphore associative*, PUF.

出口優木 (2016) 『連想照応の可能性 — フランス語の用例から』 朝日出版社

1.2. 照応詞の限定詞

(9) 連想照応の照応詞には定冠詞付き名詞句 (le N) のみが許される。不定冠詞付き名詞句 (un N) は連想照応できない。

a. *Nous arrivâmes dans un village. L'église se dressait sur une butte.* (Charolles 1990)

私たちはとある村に到着した。教会は小さな丘の上に聳えていた。

b. *Nous arrivâmes dans un village. Une église se dressait sur une butte.* (Ibid.)

私たちはとある村に到着した。教会が小さな丘の上に聳えていた。

a. は連想照応であり、*l'église* は「私たちが到着した村の教会」と解釈されるが、b. は連想照応ではなく、*une église* は「私たちが到着した村の教会」とは限らず、隣村の教会であってもよい (Charolles 1990)。

(10) ただし不定冠詞付き名詞句でも次の場合は可 (faux indéfinis)

a. *J'ai lu le dernier livre de Pierre. Une préface vaut la peine d'être étudiée.* (Azoulay 1978)

私はピエールの最新作を読んだ。序文の1つが研究に値する。

b. *J'ai lu le dernier livre de Pierre. Une des préfaces vaut la peine d'être étudiée.* (Ibid.)

この例では *une de [les préfaces]* のように、背後に定の母集合がある。

(11) 指示形容詞付き名詞句 (ce N) は連想照応できるか

Kleiber (1986), Marandin (1986), Charolles (1990) らはできないとする。

a. *Nous arrivâmes dans un village. *Cette église se dressait sur une butte.* (Charolles 1990)

私たちはとある村に到着した。その教会は小さな丘の上に聳えていた。

しかしテキスト言語学者の一部は次のような連想照応は可能とする。

b. Il est vrai que lorsque nous lisons, nous ne pensons pas que **cette histoire** est en train de vivre, de prendre forme grâce à nous. (Reichler-Béguelin 1989)

確かに私たちは本を読む時、このお話は私たちのおかげで生き生きと脈動し、形をなすのだとは思わないものだ。

また極端な立場としては、連想照応にはどのような指示表現も可能だとするものもある。

c. “Inferrable (=連想照応) allow the full range of forms found in referring expressions.

(Gundel 1996)

(8) We went to hear the Minnesota Orchestra last night. **That conductor** was very good.

私たちは昨夜ミネソタ交響楽団を聴きに行った。指揮者はとてもよかった。

【引用文献】

Azoulay, A. (1978), “Article défini et relations anaphoriques en français”, *Recherches Linguistiques* 7, 5-47.

Kleiber, G. (1986), “Adjectif démonstratif et article défini en anaphore fidèle”, J. David et al. (eds) *Déterminants : Syntaxe et sémantique*, Klincksieck, 169-185

Marandin, J. M. (1986), “Ce est un autre : l’interprétation anaphorique du syntagme défini”, *Langages* 81, 75-91.

Reichler-Béguelin, M.-J. (1989), “Anaphores, connecteurs et processus inférentiels”, A. Rubattel (ed) *Modèles du discours*, Peter Lang, 303-336.

Gundel, J. K. (1996), “Relevance Theory Meets the Givenness Hierarchy. An Account of Inferrables”, T. Fretheim et al. (eds) *Reference and Referent Accessibility*, John Benjamins, 141-154.

1.3. 照応詞の意味的制約 (1) : 人体の部位・衣服

(12) 先行詞が人で照応詞が人体の部位や衣服のときは連想照応できない。人体とその部位は典型的な「全体・部分」関係なのに、なぜ連想照応できないのだろうか。

a. *Jacques est tombé du deuxième étage. *Un pied est cassé.* (Azoulay 1978)

ジャックは3階から転落した。片脚が折れている。

b. **Pierre marche mal parce que les chaussures sont trop petites.* (Ibid.)

ピエールは歩きにくそうだ。靴が小さすぎるからだ。

その一方で、次のように人体の部位なのに連想照応できる場合がある。どうしてできる場合があるのだろうか。

c. *J’ai examiné l’accidenté du lit 3. Une jambe est fracturée.* (Ibid.)

私は3番ベッドの事故のけが人を診察した。片脚が折れている。

d. *Autour de la table, les joueurs s’épiaient. Les mains étaient crispées sur les revolvers.*

(Fradin 1984)

テーブルの回りではプレイヤーたちがお互いの様子をうかがっていた。手は拳銃にかかって

びくびくと震えていた。

ところが代名動詞構文で人体の部位に言及するときには逆に連想照応が義務的である。これはなぜだろうか。

e. Sylvie s'est lavé { les mains / les cheveux / la figure / les pieds }.

シルヴィーは {手 / 髪 / 顔 / 足} を洗った。

1. 4. 照応詞の意味的制約 (2) : 抽象名詞

(13) 照応詞が具体物ではなく抽象概念を表すときは、連想照応ができないと言われている。

a. Tous se plaignent *du régime* dans ce pays. ***La rigueur** n'est d'ailleurs ignorée de personne. (Azoulay 1978)

この国ではみんな体制に不満を持っている。その厳しさは誰もが知っている。

b. Pierre a exposé *son dernier tableau*. ***La beauté** est fascinante. (Ibid.)

ピエールは最新作の絵を展示した。美しさは圧倒的だ。

c. Ils entrèrent dans *un quartier central*. *Ils apprécièrent beaucoup **le calme**. (Kleiber 2001)

彼らは町の中心地区に入った。彼らは静かさをほめた。

しかし、抽象名詞であっても連想照応できる場合がある。これはどのように説明できるだろうか。

d. Pierre a exposé *son dernier tableau*. **Le prix** est très élevé. (Azoulay 1978)

ピエールは最新作の絵を展示した。値段は非常に高い。

e. Pierre a exposé *son dernier tableau*. **La tonalité** est très originale. (出口 2016)

ピエールは最新作の絵を展示した。色調はとても独創的だ。

f. Pierre a peint *son dernier tableau*. **La beauté** est fascinante. (Ibid.)

ピエールは最新作の絵を描いた。美しさは圧倒的だ。

1. 5. 先行詞と照応詞の文中での統語的位置

(14) 連想照応の容認度は照応詞の統語的位置にも左右される。一般的に言って、照応詞がホスト文の主語のときが最も容認度が高く、直接目的補語、間接目的補語の順で容認度が下がる。これはなぜだろうか。

a. Nous n'avons pas pu réparer *cette œuvre d'art*.

私たちはこの美術品を修復できなかった。

i) **La mutilation** est définitive.

損傷は決定的だ。

ii) ?On attribue **la mutilation** à des vandales du quartier.

損傷はこの界隈の不良のせいだとされている。

iii) *Les experts ont longuement parlé de **la mutilation** et ont conclu qu'ils ne pouvaient rien faire. (Azoulay 1978)

専門家が損傷について長々と議論して、手の施しようがないと結論した。

(15) また先行詞の統語的位置によっても容認度が変わることが知られている。これはなぜだろうか。

b. Il connaît *un restaurant*. **La spécialité** est très célèbre.

彼はレストランを知っている。名物料理はとても有名だ。

c. Il habite près d'*un restaurant*. **La spécialité** est très célèbre.

彼はレストランの近くに住んでいる。名物料理はとても有名だ。

容認度 $a \geq b$

(出口 2016)

b. のように先行詞が直接目的補語のときの方が、c. のように前置詞句に含まれているときより容認度が高い。その一方で次のように前置詞句でも容認度が高い例がある。

d. Paul entra dans *une pièce*. **Le mur** était tout taché. (Ibid.)

ポールは部屋の中に入った。壁は一面染みだらけだった。

1.6. 照応詞のホスト文の述語制約

(16) 照応詞のホスト文の述語の意味内容も連想照応の容認度を左右する。

a. Paul est entré dans *une pièce*. **L'horloge** ne marchait pas.

ポールは部屋に入った。掛け時計は動いていなかった。

b. Paul est entré dans *une pièce*. **L'horloge** était très grande.

ポールは部屋に入った。掛け時計はとても大きかった。

c. Paul est entré dans *une pièce*. **L'horloge** était fabriquée en Suisse.

ポールは部屋に入った。掛け時計はスイス製だった。

容認度 $a \geq b > c$

(出口 2016)

出口は次のように述べている。

「照応詞の述部内容のちがいをみると、照応詞の外的な状態を記述しているものに比べ、目には見えないような属性を記述しているものは容認度が下がる傾向にある」 (出口 2016 : 31)

(17) 人体の部位を表す名詞は一般に連想照応できないが、文脈によって可能なことがある。しかしその場合もホスト文の述語によって容認度が変化する。

a. *Sophie* rêvait. ?**Les yeux** étaient fermés.

ソフィーは夢を見ていた。目は閉じられていた。

b. *Sophie* rêvait. ***Les cheveux** étaient bruns.

ソフィーは夢を見ていた。髪は茶色だった。

容認度 $a > b$

(出口 2016 : 60)

出口は次のように述べている。

「照応詞を含む文において恒常的性質を表すと強く認識される述語が伴う場合には、先行研究どおり連想照応は起こらない。(…)『瞳を閉じ

ている』という一時的状態をその場の情景として描写していると見なせる場合は、連想照応の容認度が上がる。」 (出口 2016 : 60-61)

なぜ「目に見える一時的状態を情景として描写する」と容認度が上がるのだろうか。どうして恒常的性質を表す述語は容認されないのだろうか。

1.7. 先行詞を含む文の意味内容

(18) 先行詞を含む文がどのような意味内容であるかも連想照応の容認度に影響する。

a. Il y avait *une valise* sur le lit. ***Le cuir** était tout taché. (Kleiber 1999)

ベッドの上にスーツケースがあった。革は染みだらけだった。

b. Paul toucha *la valise*. **Le cuir** était tout souple. (Ibid.)

ポールはスーツケースに触れた。革はとても柔らかかった。

(19) Charolles は以下の例の a. b. は連想照応であるが、c. d. はそうではないとしている。Charolles は先行詞を含む文が十分に豊富な意味内容を持ち、意味関係の網の目を形成することが必要だと考えている。

a. Sophie *s'est mariée*. **La cérémonie** s'est déroulée dans l'intimité. (Charolles 1990)

ソフィーは結婚した。結婚式は内輪で行われた。

b. Max *a assassiné son voisin*. **Le meurtre** a eu lieu dans la nuit de Noël. (Ibid.)

マックスは隣人を殺した。殺人はクリスマスの夜に起きた。

c. Il y a *un mariage* à la mairie. **La cérémonie** ne va pas durer longtemps. (Ibid.)

役場で結婚式がある。式は長くはかかからないだろう。

d. Il y a eu *un assassinat* à ... **Le meurtre** n'a pas été revendiqué. (Ibid.)

…で殺人があった。犯行声明は出されなかった。

【引用文献】

Kleiber, G. (1999) "Anaphore associative et relation partie-tout : condition d'aliénation et principe de congruence ontologique", *Langue française* 122, 71-99.

1.8. 照応詞のホスト文の時制

(20) 先行研究ではほとんど問題にされたことがないが、照応詞のホスト文の時制には著しい偏りがある。出口 (2016)の調査では、Kleiber (2001)の 90 の例文の時制の分布は次のようであったという。90 のうち 52 例が半過去形である。

S1 (先行詞を含む文)	S2 (照応詞のホスト文)	
単純過去形	半過去形	23
複合過去形	半過去形	16
半過去形	半過去形	13
S2 が現在形で状況を表す文		8
その他		21

上の表のその他には次のような文が含まれている。

- a. *Nous entrâmes dans un restaurant. Le garçon refusa de nous servir le menu.*

(Kleiber 2001)

私たちはレストランに入った。給仕は定食を出すのを断った。

- b. *La voiture dérapa et s'écrasa contre un platane. Le conducteur fut éjecté.* (Ibid.)

車はスリップしてプラタナスにぶつかった。ドライバーは車の外に投げ出された。

- c. *Paul a réparé une vieille voiture. Il a dû changer le volant.* (Ibid.)

ポールは古い自動車を修理した。彼はハンドルを交換しなくてはならなかった。

連想照応では、先行詞を含む S1 が出来事を表し、照応詞のホスト文 S2 が状態を表すという組み合わせが好まれる。このことにはどのような意味があるのだろうか。

1.9. 所有形容詞付き名詞句 (son N)、中性代名詞 en との競合

(21) 連想照応は、先行詞と照応詞の間の所有・帰属関係や全体と部分の関係を表すので、同様の意味を表す所有形容詞付き名詞句 (son N)、中性代名詞 en と競合する。

- a. *Nous passâmes devant une église. La porte était ouverte.*

私たちはとある教会の前を通った。扉は開いていた。

- b. *Nous passâmes devant une église. Sa porte était ouverte.*

私たちはとある教会の前を通った。その扉は開いていた。

- c. *Nous passâmes devant une église. La porte en était ouverte.*

私たちはとある教会の前を通った。その扉は開いていた。

(22) 所有形容詞と en の使い分けは次のようになると言われている。

- a. 所有者と所有物が同一文中にあるときは所有形容詞を用いる。

Cet hôtel est réputé pour sa cuisine. このホテルは料理で有名だ。

- b. 所有者と所有物が同一文中にないときは、en を用いることができる。

Je n'ai pas lu ce livre ; j'ignore même qui en est l'auteur.

私はその本を読んでいない。著者がだれなのかさえ知らない。

(東郷注：ただしこの場合も所有形容詞は使用可能 *j'ignore même qui est son auteur.*)

ただし en の使用には次の制約がある。

- c. 所有物の前に前置詞があるときは所有形容詞を用いる。

Cette légende est très vieille ; peut-être quelque fait historique est-il à son origine.

この伝説は非常に古い。たぶん何らかの史実がその起源にある。

(東郷注：次のようにはできない **peut-être quelque fait historique en est-il à l'origine*)

- d. 所有物が主語のとき、動詞が属詞を要求する動詞であるときに限り en を使える。

Ne répondez pas à cette lettre ; le ton en est impertinent.

この手紙に返事を出さないでください。言葉遣いがぶしつけだから。

(東郷注：ただしこの場合も所有形容詞は使用可能 *son ton est impertinent*)

- e. 動詞が動作動詞であるときは、en は使えない。所有形容詞を用いる。

Ce projet est excellent, *son* succès me réjouit.

この計画はすばらしい。これが成功すればうれしい。

(東郷注：次のようにはできない *le succès m'*en* réjouit)

(目黒士門『現代フランス広文典』白水社、2015 のまとめ)

連想照応と所有形容詞と en が競合しどれも使えるとき、そのあいだには何かちがいがあ
るのだろうか。

2. さらに連想照応について

2.1. 連想照応という問題群

- (1) 連想照応の問題を初めて取り上げたのは Guillaume である。

Les noms, tels qu'ils existent en nous, à l'état de naissance, ont entre eux une infinité de liens, et il suffit, dans bien des cas, d'en prononcer un pour qu'aussitôt d'autres, en plus ou grand nombre, viennent mentalement s'y joinder. (...)

À une certaine profondeur dans l'esprit, il existe une image d'ensemble, utile au discours. Pour ne pas la morceler, on démontre à la même profondeur les images partielles dont elle se compose. Voici un assez long exemple où un rapport associatif de ce genre est maintenu, cependant que la narration se développe : *Et, comme le voyageur passait alors devant l'église, les saints personnages qui étaient peints sur les vitraux parurent avoir de l'effroi. Le prêtre, agenouillé devant l'autel, oublia sa prière.*

(Guillaume, G., *Le problème de l'article et sa solution dans la langue française*, Nizet, 1975, 163)

私たちの内部で発生状態にある名詞は、お互いの中で無数の関係を取り結んでいる。多くの場合、名詞を 1 つ口に出すと、心のなかで多くの名詞が数珠つなぎになって出て来るのである。(…)

心のある深さにおいて、談話にとって有用な全体のイメージが存在する。それを分断しないようにして、全体を構成する部分的なイメージを同じ心の深さに示す。語りが進行する間、このような連想関係がずっと維持されている長い例を次に示そう。「そして、旅人が教会の前を通ったとき、ステンドグラスに描かれた聖人たちは恐れおののいているように見えた。祭壇にぬかずに司祭は祈りを忘れた」(ボールド体の定冠詞が連想照応)

- (2) 連想照応 (anaphore associative) は最もよく知られた呼び名であるが、同じ現象は他の名前でも呼ばれている。

- a. 概念照応 anaphore conceptuelle

Pinchon, J., *Les pronoms adverbiaux en et y*, Droz, 1972.

- b. 間接照応 anaphore indirecte

F. Erku & J. Gundel, "The pragmatics of indirect anaphors", J. Verschueren (ed) *The Pragmatic Perspective*, Benjamins, 1987.

- c. 橋渡し推論 bridging inference

Sanford, A. J. & Garrod, S. C., *Understanding Written Language*, Wiley, 1981.

d. 推論可能物 inferrables

Prince, E. “Toward a taxonomy of given-new information”, P. Cole (ed) *Radical Pragmatics*, Academic Press, 1981

2.2. 先行詞と照応詞を結びつける関係

(3) Azoulay (1978) の主張

Azoulay は先行詞と照応詞を結びつける関係は次の論理式で表せるとする。

($\exists X$) (Proposition α Y)

Condition $X > Y$

“il existe une entité X pour laquelle la proposition α est vraie de Y, X et Y étant reliés intrinsèquement. X est le thème du discours.”

「実体 X が存在し、命題 α が Y について真であり、X と Y とは内在的关系で結ばれている。X は談話の主題である」

(Azoulay, A. (1978), “Article défini et relations anaphoriques en français”, *Recherches Linguistiques* 7, 5-47, p. 40)

【解説】

次の例で X は先行詞 (un beau stylo) で、Y は照応詞 (la plume) である。命題 α とは照応詞のホスト文 (番目の文) に当たる。

J’ai acheté un beau stylo hier ; mais la plume est déjà cassée.

私は昨日立派な万年筆を買ったが、ペン先はもう壊れてしまった。

上の論理式は次のような条件を規定している。命題 la plume est déjà cassée が la plume について真であるとき、先行文脈に la plume と内在的关系を持つ実体 (un beau stylo) が存在し、かつそれは談話の主題である。そのようなときに連想照応が成立する。

(4) 内在的关系 lien intrinsèque とは何か

実体 A が存在するとき、

a. Elle implique l’existence des éléments qui constituent cette entité A.

その存在は A を構成する要素の存在を含意する。

b. Elle implique l’existence de l’ensemble dans lequel A est inclus.

その存在は A が含まれるより大きな集合の存在を含意する。

c. L’existence d’une entité A entraîne enfin celle de ses propriétés caractéristiques : forme, poids, couleur, prix... A の存在からその固有の特性 (形、重さ、色、価格、etc.) が導かれる。

(Azoulay *op. cit.*, p. 39)

【解説】

a. は実体 A にはその部分が存在することを述べている。たとえば A が椅子だったとすると、椅子には座面、背もたれ、脚などの部分がある。b. は逆に実体 A が部分である全体

が存在することを述べている。A がペン先だとすると、A がその部分である万年筆が存在する。また A が椅子だとすると、より大きな集合としてある家の家具類を想定できる。c. は実体 A には形、重さ、色などの属性が付随していることを述べている。

(5) 例示

たとえば *voiture* — *moteur*, *stylo* — *plume* は内在的関係にある。

a. *J'ai acheté une voiture d'occasion ; mais le moteur est en bon état.*

私は中古車を買ったが、エンジンはよい状態だ。

b. *J'ai acheté un beau stylo hier ; mais la plume est déjà cassée.*

私は昨日立派な万年筆を買ったが、ペン先はもう壊れてしまった。

しかし、*tableau* — *beauté*, *régime* — *rigueur* は内在的関係にはない。美しくない絵はいくらでもあり、苛酷ではない体制もいくらかもある。

c. *Pierre a exposé son dernier tableau. *La beauté est fascinante.*

ピエールは最新作の絵を展示した。その美しさは驚異的だ。

d. *Tous se plaignent du régime dans ce pays. *La rigueur est d'ailleurs ignorée de personne.*

みんなこの国の体制を嘆いている。その苛酷さは知らない人がいない。

(Azoulay *op. cit.*, p. 39)

(6) 連想照応はステレオタイプ化された関係に基づく

Lorsqu'un énoncé introduit un N, il introduit du même coup un espace référentiel. Dans la suite du discours, on peut référer à quelconque des éléments de cet espace, même si cet élément n'a jamais été nommément mentionné auparavant. Dans le cas qui nous intéresse, cette hypothèse prend la forme particulière : certains éléments sont introduits indirectement dans un espace référentiel par le stéréotype attaché au N introduisant cet espace.

(Fradin, B. (1984), "Anaphorisation et stereotypes nominaux", *Lingua* 64, 325-369, p. 329)

ある言表が名詞句 N を談話に導入するとき、その言表は同時に指示空間を導入する。後続談話において、たとえそれまで明示的に言及されていなくても、この指示空間に属する要素を指すことができる。ここでの議論との関係で言うと、この仮説は次のような特定の形を取る。いくつかの要素は間接的に指示空間に導入されるが、それはその空間を導入する名詞句 N に貼り付いたステレオタイプの働きによる。

(7) ステレオタイプの実例

On voit un restaurant. On entre. Hélas ! Le menu n'est plus servi. (Fradin, op. cit.)

レストランを見つけて入る。残念。定食のサービス時間はもう終わっている。

先行詞 *restaurant* は次のような意味表示を持つとされている。

Restaurant : /Dans X il y a un menu, un/des serveur(s), un/des cuisinier(s), etc./

(8) ステレオタイプの定式化 (Fradin, *op. cit.*)

先行詞 N_j と照応詞 N_i の間には次のような関係が存在する。

N_j : /x avoir N_i/ ou encore : /x être avec N_i/

実例：

- a. Tilleul : /x être avec un tronc/
- b. Stylo : /x être avec une plume/
- c. Veste : /x être avec des manches/

(9) Fradin は上のようなステレオタイプ化された名詞句同士の関係があるものだけを連想照応と見なすので、次の例は連想照応から除外される。(例は Fradin, *op. cit.*)

- a. L'embarquement s'est mal passé, mais il a bien apprécié **la traversée**.

乗船のときはゴタゴタしたが、彼は航海を大いに楽しんだ。

- b. Le président est mort. **Les drapeaux** sont en berne. (Azoulay 1978)

大統領が亡くなった。旗は半旗になっている。

- c. Il s'approcha du four. **La chaleur** devenait extrême.

彼は竈に近づいた。熱さは頂点に達した。

Fradin はこれらの例はシナリオか因果関係に基づくものであり、連想照応には含まれないと考えている。特に Azoulay の例 b. ではそもそも照応関係が存在しないとする。

(10) フレームの定義

連想照応は認知的フレーム (cognitive frame) に基づくと考える人は多い。Fradin のステレオタイプもその亜種である。フレームは認知科学者の Minsky が提唱した概念である。

When one encounters a new situation, one selects from memory a structure called a *frame*. This is a remembered framework to be adapted to fit reality by changing details as necessary. A frame is a data-structure for representing a stereotyped situation like being in a certain kind of living room or going to a child's birthday party. (...) We can think of a frame as a network of nodes and relations. The top levels of a frame are fixed, and represent things that are always true about the supposed situation. The lower levels have many terminals — slots that must be filled by specific instances of data. (...) A frame's terminals are normally already filled with 'default' assignments. (...) Frames are probably never stored in long-term memory with unassigned terminals values. Instead, what really happens is that frames are stored with weakly-bound default assignments at every terminals.

(Minsky, M. "Frame system theory", P. N. Johnson-Laird et al. (eds) *Thinking. Reading in Cognitive Science*, Cambridge Univ. Press, 1977, 355-376)

私たちが新たな状況に直面したとき、私たちは記憶の中から「フレーム」と呼ばれる構造を引き出す。それは記憶に蓄えられた枠組で、細部に変更を加えて現実に当てはまるようにする。フレームとは、居間でくつろいでいるとか、子供の誕生パーティーに行くなどの、ステレオタイプ化された状況を表すデータ構造である。(…) フレームは結節点とその関係のネットワークと考えることができる。フレームの最上部は固定されており、そこには当該の状況にいつも当てはまるような項目が並んでいる。それより下の階層は終端部で、データの具体的な項目を入れるスロットである。

(…) フレームの終端部にはふつうはデフォルト項目が入っている。(…) おそらくフレームは、終端部に具体的な項目を入れずに長期記憶に保存されることはないと思われる。そうではなく、実

際に起きているのは、フレームの終端部には弱い束縛を受けたデフォルト項目が格納されているのだろう。

(11) シナリオ、スクリプト

フレームとよく似た概念にシナリオ、またはスクリプトがある。フレームとのちがいは、フレームは時間的に固定したデータ構造であるのに対して、シナリオ・スクリプトは時間の流れの中での出来事の連鎖を表すという点である。

A script, as we use it, is a structure that describes an appropriate sequence of events in a particular context. A script is made up of slots and requirements about what can fill those slots. (...) a script is a predetermined, stereotyped sequence of actions that define a well-known situation. A script is, in effect, a very boring little story. Scripts allow for new references to objects within them, just as if these objects had been previously mentioned; objects within a script may be take 'the' without explicit introduction because the script itself has already implicitly introduced them.

(1) John went into the restaurant.

He ordered a hamburger and a coke.

He asked the waitress for the check and left.

(Schank, R. C. & R. P. Abelson, "Scripts, plans and knowledge", P. N. Johnson-Laird et al. (eds) *Thinking. Reading in Cognitive Science*, Cambridge Uni. Press, 1977, 421-432)

我々の言うスクリプトとは、ある文脈における一連の適切な出来事を記述する構造である。スクリプトはスロットと、スロットに入ることができるものの条件とからなる。(…) スクリプトは、あらかじめ定められ、ステレオタイプ化された一連の行動であり、よく知られた状況を定義するものである。実際にスクリプトは、とても退屈な小さな物語である。スクリプトではその中に含まれている事物を、あたかもすでに言及されたかのように指示することができる。スクリプトに含まれた事物は、明示的に談話に導入されていなくても定冠詞 *the* を取ることができる。スクリプト自体がその事物を暗黙のうちに談話に導入しているからである。

2.3. 連想照応ができる例とできない例：その原理をめぐって

(12) Azoulay (1978)の説

人体とその部位は連想照応できない。

a. Jacques est tombé du deuxième étage. Un doigt / Un pied est cassé.

ジャックは3階から転落した。指/足が1本折れた。

Azoulay は次のように説明している。連想照応の先行詞は談話主題 (*thème du discours*) である。しかし照応詞は先行詞とは談話的に切り離され、後続談話において注意は照応詞の指示対象に集中する。ところが先行詞が人間のとき、人間は大きな主題であるため、人間を離れて人体の部位だけに焦点を当てるのは難しい。

“Il est difficile de parler d'un objet dont le rapport à un être humain est étroit sans mentionner cet être humain. L'énoncé (105) [上の例文 a.] impliquerait que le pied est l'élément important du discours, qu'il est considéré dans son existence propre et que Jacques n'est pas affecté par ce qu'on en dit, ce qui n'est pas plausible.” (p. 29)

人間と密接な関係のある物について、その人間を話題にせずに語るのは難しい。例文 (105)は足が談話の重要な要素であり、それ自体が独自の存在として捉えられ、足について語ることがジャックと無関係であるような印象を与えるので容認されないのである。

(13) 連想照応ができる場合 (Fradin 1984)

a. *J'ai acheté un stylo, mais j'ai déjà tordu la plume.*

私は万年筆を買ったが、もうペン先を傷めてしまった。

b. *On a dû remorquer le bateau, histoire de ménager la quille.*

船を曳航しなくてはならなかった。竜骨を守るためだ。

c. *Regarde ta veste : les manches sont tout élimées.*

君のジャケットを見てごらん。袖口がすっかり擦り切れてるよ。

(14) 連想照応ができない場合 (Fradin 1984)

a. 人と衣服

i) *Les enfants sont rentrés.*Les souliers sont pleins de boue.*

子供たちはもう戻っている。靴が泥だらけだ。

ii) **Quand nous avons invité le concierge, cet imbécile a déchiré le manteau.*

私たちが管理人を家に招待したとき、あの馬鹿はコートを破いてしまった。

b. 抽象名詞

i) *Ils habitent un quartier central. *J'apprécie beaucoup le calme.*

彼らは町の中心地区に住んでいる。私はその静けさがとてもよいと思う。

ii) *Nous avons utilisé ce théorème. *La découverte est récente.*

私たちはその定理を用いた。その発見は最近のことだ。

c. 関係名詞

i) *Ma voisine est inquiète : *elle n'a pas revu le mari depuis lundi.*

隣の奥さんは心配している。ご主人を月曜から見かけていないのだ。

ii) **Sur cette photo on distingue le capitaine mais on ne voit pas l'ami.*

この写真には船長は写っているが、友達が見当たらない。

d. 人体とその部位

i) *Le garçon a couru sous la pluie. *Les pieds étaient mouillés*

少年は雨の中を走った。足は濡れていた。

ii) **Elle a heurté le chien mais elle n'a pas coincé la patte.*

彼女は犬にぶつかったが、足は踏まなかった。

(15) Fradin は上に挙げた衣服、抽象名詞、関係名詞、人体の部位でなぜ連想照応が成立しないのかを次のステレオタイプの式を用いて説明している。

Nj : /x avoir Ni/ ou encore : /x être avec Ni/

つまり次のような式はステレオタイプとして成り立たないということである。

a. **Enfant : /x être avec des souliers/*

b. *Quartier central : /x être avec le calme/

c. *Voisine : /x être avec un mari/

ただし人体とその部位については分離不可能所有 (possession inaliénable)が関係していると示唆するに留まり、説明を保留している。

(16) Fradin (1984) で注目されるのは、ふつうは容認されない人体部位の連想照応でも次のようにすると容認されるという指摘である。

a. Autour de la table, *les joueurs s'épiaient. Les mains* étaient crispées sur les revolvers.

テーブルの回りではプレイヤーたちがお互いの様子をうかがっていた。手は拳銃にかかってびくびくと震えていた。

b. *Les coureurs* redoublent d'effort. On voit **les muscles** saillir sous les maillots.

ランナーたちはスパートする。シャツの下で筋肉が盛り上がっているのが見える。

Fradin はこのようなケースでは、シナリオか因果関係が連想照応を可能にするとする。

C'est, semble-t-il, parce que les deux propositions se trouvent dans une relation de scénario ou de "cause/consequence". (p. 362, note 7)

それはおそらく 2 つの命題がシナリオの関係か、「原因・結果」の関係に置かれているためだと思われる。

(17) Kleiber (1999)は次の場合に連想照応ができないとする。

a. 有生物

?*Le garçon* a couru sous la pluie. **Les pieds** étaient mouillés.

少年は雨の中を走った。足は濡れていた。

b. 属性

?*Ils habitent un quartier central. J'*apprécie beaucoup **le calme**.

彼らは町の中心地区に住んでいる。私はその静けさがとてもよいと思う。

c. 一時的状態・出来事 (entité temporelle)

?*Marie* est une vieille Haut-Rhinoise. **La naissance** a eu lieu avec le siècle.

マリーは年配のオー・ラン県出身の女性だ。その誕生は今世紀の初めだ。

d. 素材

?*Il* retira lentement *la robe. La laine* était douce.

彼はゆっくりとドレスを脱がせた。ウールは柔らかかった。

(Kleiber, G., "Anaphore associative et relation partie-tout : condition d'aliénation et principe de congruence ontologique", *Langue française* 122, 70-100, 1999)

(18) Kleiber は先行詞と照応詞の liens intrinsèques「内在的繋がり」、あるいはステレオタイプでは説明できない例があるとする (Kleiber, *op. cit.*)。

a. ?*Paul* aime *les basketteurs. La grande taille* les met au-dessus des autres.

ポールはバスケットボールの選手が好きだ。背が高いので他の人たちより抜きん出ている。

b. ?*Un basketteur* entra. **La grande taille** fit qu'il dut se baisser.

バスケットボールの選手が入って来た。背が高いせいでかがまなくてはならなかった。

c. ?La cabane abritait *un chien*. **Les aboiements** étaient touchants.

小屋には犬がいた。吠え声は哀れだった。

バスケットボール選手と身長の高さにはステレオタイプの関係がある。また犬がワンワン吠えるのも犬のステレオタイプであり、そこには内在的繋がりがあると言える。ところがこのような例は容認されない。

(19) Kleiber は連想照応ができない理由を次の 2 つの原理で説明している。

(A) Condition d'aliénation 分離条件

le référent d'une anaphore associative doit être présenté ou donné comme aliéné par rapport au référent de l'antécédent

連想照応の指示対象は先行詞の指示対象から分離されたものとして提示されなくてはならない

(B) Principe de congruence ontologique 存在論的合同的原則

Il semble donc que (...) il y ait un principe de congruence ontologique qui stipule que l'aliénation exigée par l'anaphore associative peut avoir lieu si l'élément subordonné est du même type ontologique que le référent de l'antécédent. (...)

Un volant est ainsi du même type que *la voiture* : il possède une matière et une forme. *La couleur* de la voiture, par contre, ne possède ni matière ni forme propres, mais exige un support, en l'occurrence celui de la voiture.

存在論的合同的原則があるように思われる。この原則によれば、連想照応に必要とされる対象物の分離は、従属する要素 (=照応詞の指示対象) が先行詞の指示対象と同一の存在論的タイプのときに限り可能だとされる。(…)

ハンドルは自動車と同じタイプである。素材を持ち、形があるからだ。一方、色には固有の素材も形態もなく、支えを必要とする。この場合の支えは自動車である。

(17) a.~d.はこの 2 つの原理によって次のように説明されるとする。(17) a.の「人体・部位」はまず分離条件に抵触するため排除される。人体の部位は分離不可能である。また存在論的合同的原則にも抵触する。意思を持ち自由に移動する人間と、意思を持たず自由に移動できない体の一部は同じ存在論的様態を持たない。

(17) b. の実体とその属性についても同様である。属性は対象と不可分であり、「町の静けさ」から「静けさ」だけを分離することはできない。また「町」と「静けさ」とは同じ存在論的様態を持たない。(17) c.の一時的状態・出来事、(17) d. の素材にも同じように説明することができる。

2.4. 連想照応とクローズアップ効果、描写性

連想照応のメカニズムについては、Azoulay の “*liens intrinsèques*” 「内在的繋がり」説、Fradin のステレオタイプ説、Kleiber の分離条件と存在論的合同的原則によってほぼ説明され

ている。Kleiber は連想照応のメカニズムについて独自の説を立てたというよりは、Azoulay や Fradin の分析を一応認めつつ、それでは説明できない事例を扱う補助的仮説を付け加えたと言える。興味深いのは、連想照応のメカニズム自体ではなく、ふつうは容認度が低い事例でも、ある条件が整うと容認度が上がる現象である。

(20) 人体の部位でも次の c. d. のような絶対構文 (construction absolue) では定冠詞を用いなくはならない。(Kleiber 1999)

a. ?Max entre. **Les yeux** sont hors de leurs orbites. (Julien 1983)

マックスは中に入る。目は眼窩から飛び出している。

b. ?Paul ne dit mot. **Les joues** étaient gonflées à bloc.

ポールはひと言も口をきかなかった。頬は一杯に膨らんでいた。

c. **Les yeux** brillants, Max entre en criant.

目を輝かせてマックスは叫びながら入ってくる。

d. **Les joues** gonflées à bloc, Paul ne dit mot.

頬を一杯に膨らませてポールはひと言も口をきかなかった。

(21) ふつう容認されない属性や素材でも、次の例では容認される。(Kleiber 1999)

a. ?Il y avait *une valise* sur le lit. **Le cuir** était tout taché.

ベッドの上にスーツケースがあった。革は染みだらけだった。

b. Paul toucha / tâta / caressa *la valise*. **Le cuir** était souple.

ポールはスーツケースに触れた / 叩いた / なでた。革は柔らかかった。

c. *La valise* se déchira. **Le cuir** était trop vieux.

スーツケースは破れた。革が古くなっていたのだ。

d. Paul gratta / érafla *la voiture*. **La peinture** fut rayée en profondeur.

ポールは車を引っ掻いた / 擦り傷を付けた。塗装には深い擦り傷が残った。

Lorsque la représentation de la phrase avec l'antécédent comporte elle-même déjà un facteur aliénant la matière, le principe de congruence ontologique ne tient plus et une anaphore associative peut s'établir, puisque la condition d'aliénation se trouve satisfaite. C'est ainsi que les séquences (67)-68) n'ont rien de bizarre, parce que les prédicats *toucher, tâter, caresser, se déchirer* ou *gratter* et *érafler* impliquent un contact avec la matière (et non avec la forme) et sélectionnent ainsi la matière comme *zone active* du référent (R. W. Langacker, 1987 ; G. Kleiber 1999b)

先行詞を含む文の表示が素材を分離する要因を持つとき、存在論的合同原則は働かなくなり、連想照応が可能になる。分離条件が満たされるからである。(67)-68) [上の a.~d.]にはおかしな点はない。

「触れる」「叩く」「なでる」「やぶれる」「引っ掻く」「擦り傷を付ける」といった述語は(形とではなく)素材との接触を含意し、素材を指示対象のアクティブ・ゾーンとして選択するからである。

(22) アクティブ・ゾーンとは何か

「冷蔵庫を開ける」「コンロを消す」では、参照点が「冷蔵庫」「コンロ」、直接的に

関係する要素は「扉」「火」です。(…)「冷蔵庫を開ける」「コンロを消す」で「扉」や「火」に当たる要素をアクティヴ・ゾーン (=活性化領域 : active zone) と呼びます。プロファイルされるのは対象全体(「冷蔵庫」「コンロ」)ですが、直接に関連するのはその一部、つまりアクティヴ・ゾーンの部分です。

このように考えると、隣接性は、参照点とアクティヴ・ゾーンの関係に置き換えることができます。ですから、多くのメトニミーは全体と部分、すなわち参照点とアクティヴ・ゾーンの関係において一般化できます。その他、「ナベが煮える」「机が散らかっている」「球場が沸く」「ベンチが動く」「胃袋を預かる」といった表現でも、「(ナベの中の) 具」「(机の上の) 書類」「(球場の中の) 観衆」「(ベンチの) 監督・コーチ」「食物・食事」が、それぞれのアクティヴ・ゾーンです。

(吉村公宏『はじめての認知言語学』研究社、2004, pp.110-111)

(23) 先行文脈で描かれた状況が照応詞の指示対象を活性化する。

a. Paul mesure la planche. **La longueur** était de 5m, **l'épaisseur** de 5cm.

ポールは床板を計った。長さは 5m で厚さは 4cm だった。

b. Paul décrit / vante sa voiture. **Le poids** est léger, **le confort** est extraordinaire, **la couleur** est dans le vent...

ポールは自分の車を描写した / 自慢した。重量は軽く、乗り心地はすばらしく、色は流行で...

c. Paul a exposé son dernier tableau. **Le prix** est très élevé. (Azoulay 1978)

ポールは最新作の絵を展示した。値段はとても高い。

Si elle semble bien formée, ce n'est pas seulement parce qu'il s'agit d'une propriété *intrinsèque* comme le pense Azoulay (1978), mais parce que la situation d'*exposer un tableau* rend saillant ou permet d'inférer l'idée de vente et active donc par là la facette *prix* qui s'y associe. (Kleiber 1999)

この文が適格なのは、Azoulay が考えているように内在的的属性だからというだけの理由によるのではない。「絵を展示する」という状況によって、「販売」という概念を推論することが可能となり、絵に付随する「値段」という側面が際立つからである。

(24) 視覚 (perception visuelle) が身体部位を切り取り分離する

a. *Le malade* est livide. **Les yeux** sont hors de leurs orbites. (Julien)

病人の顔は蒼白だ。目は眼窩から飛び出している。

b. Autour de la table, *les joueurs* s'épiaient. **Les mains** étaient crispées sur les revolvers.

テーブルの回りではプレイヤーたちがお互いの様子をうかがっていた。手は拳銃にかかってびくびくと震えていた。

c. *Les coureurs* redoublent d'effort. On voit **les muscles** saillir sous les maillots.

ランナーたちはスパートする。シャツの下で筋肉が盛り上がっているのが見える。

Nous pensons que J. Julien a raison et que dans tous ces enchaînements la partie du corps se trouve effectivement isolée par un mode d'aliénation, qui, dans le cas de 78) comme l'indiquent les verbes de perception *s'épier* et *voir*, semble être celui de la vision, mais soulignons qu'elle n'est

pas opérée directement sur le référent animé, mais uniquement sur le corps. Dans 77), celui-ci est mis en saillance par le fait que le référent animé est un malade et dans 78) par le fait qu'une vision a évidemment pour zone active le corps, comme nous l'avons signalé ci-dessus. La congruence ontologique est donc respectée. (Kleiber 1999)

私は Julien の言うことは正しいと考える。そして上の例文において、人体の部位は実際に分離されており、分離を実現している方法は 78) [=b.]では「互いに見張る」「見る」という知覚動詞が示しているように、視覚だと考える。しかしその分離は、人間という有生物に直接行われているのではなく、身体に対して行われていることに注意しよう。77) [=a.]で身体がハイライトされているのは、病気の患者だからである。78) [=b.]では、すでに指摘したように、視覚が身体をアクティブ・ゾーンとしているからである。このため存在論的合原原則は守られている。

cf. Julien, J., 1983 “Sur une règle de blocage de l'article défini avec des noms de parties de corps, *Le Français moderne* 51, 135-156.

【解説】

Julien は身体部位はふつう連想照応できないが、医学的文脈 (contexte médical) なら可能だとした。医学的文脈においては、人体はいわば物として扱われるためである。その上で Kleiber は例 b. c. で「視覚」の重要性を指摘している。先行文脈に「～は見た」のように知覚動詞が用いられていると、後続文は誰かの目に映った映像のように感じられる。

Emma regarda le jardin par la fenêtre. Il pleuvait sur le jardin désert.

エンマは窓から庭を眺めた。人気のない庭には雨が降っていた。

たとえばこの例では、2 番目の文は登場人物エンマの見た光景と見なすのがふつうである。Kleiber は visison 「視覚」が先行文脈の場面の一部を切り取ることによって、本来ならば人体から切り離すことのできない身体部位が分離可能になると考えている。

“La raison d'une telle situation tient au fait que l'aliénation qui sert de modèle à l'aliénation en pensée ou imaginaire exigée par l'anaphore associative est celle de la perception visuelle. Le système visuel permet d'isoler ou de détacher un élément sur une situation ou un objet sans que l'élément ainsi aliéné cesse pour autant de faire partie de la situation ou de l'objet. Or, ce modèle perceptuel ne peut aliéner que des éléments du même type ontologique que l'ensemble sur lequel ils sont isolés. Reprenons l'exemple de notre caméra. Il montre clairement qu'une aliénation visuelle est possible pour les parties, mais non pour les propriétés et événements.” (Kleiber 1999)

このような状態になっている理由は、連想照応において必要とされる頭の中で行なう分離のモデルが視覚だからである。視覚は、状況や事物の一部を切り取ることを可能にし、こうして切り取られてもその一部は全体の部分であることには変わりがない。この視覚モデルは、それが切り取る全体と同じ存在論的タイプの物しか切り取ることができない。カメラの比喩をもう一度持ち出そう。人体の部分は視覚的に分離することが可能だが、属性や出来事を切り取ることはできないのである。

連想照応にはクローズアップ効果があると言われることもこれと関係している。

Il s'abrita sous un vieux tilleul. Le tronc était tout craquelé. (Fradin 1984)

彼は菩提樹の古木の下に避難した。(その) 幹は一面ひび割れていた。

この例では、まずカメラが少し離れた場所から菩提樹全体を映し、次に近寄って幹だけをクローズアップで映しているような印象がある。

実際、出口 (2016: 32)はこの点を重視し、次のような仮説を提示している。

連想照応における描写性（仮説）

照応詞を含む文の述部が、動作、状態または属性に関わらず、照応詞の指示対象を含む場面を記述し、聞き手（読み手）にその場景を、場面と共に視覚的イメージとして提供する力を、本稿では文のもつ「描写性」として定義し、連想照応の成否に関わる重要な要素として指摘する。

3. 連想照応と「定」（*défini*）の問題

過去の研究において連想照応は、照応過程の中で特殊な照応と見なされてきた。その理由は次の点に集約される。

(A) 連想照応では、照応詞と見なされる定名詞句 (*le N*)と同一指示の先行詞が存在しない。これはふつうの照応の定義から外れている。また *Pierre se coupa du pain puis rangea le couteau*. 「ピエールはパンを切るとナイフを片づけた」(Charolles 1990)のような例では、そもそも先行詞に当たるものがない。

(B) 連想照応では同一指示の先行詞がないにも関わらず、照応詞 (*le N*)は定 (*défini*)という意味特性を持つ。この定性の起源はどこにあるのだろうか。

果たして過去の研究が示唆するように、連想照応は特殊な照応、マージナルな照応なのだろうか。この問題を考えるためには、そもそも「定」(*défini*)とは何か、どのような指示対象が定と見なされるのかを考えなくてはならない。

(1) Hawkins (1978)は定冠詞の用法を次のように分類している。

Hawkins, J. A., *Definiteness and Indefiniteness: A Study in Reference and Grammaticality Prediction*, Croom Helm, 1978,

a. Anaphoric use 照応的用法

i) Bill was working at a lathe. Suddenly, *the lathe* stopped.

ii) Bill was working at a lathe. Suddenly *the machine* stopped.

iii) Fred travelled to Munich. *The journey* was long and tiring.

b. Visible situation use 指示対象が見えている現場指示

Pass me *the book*.

c. Immediate situation use 指示対象が見えていない現場指示

Beware of *the dog*.

d. Larger situation use 共同体で共有された知識に基づく用法

同じ村に住む人が *the church, the pub* と言ったり、イギリス人が *the Queen, the Prime minister* と言ったり、どこの人でも *the sun* と言うような場合。

e. General knowledge use 一般的知識に基づく用法

知らない町にいて **the town clerk** 「町役場の書記」と言う場合。

f. Associative anaphora 連想照応

a book — the author / the pages / the content など

Hawkins はこれ以外に次の Unfamiliar uses with explanatory modifiers を挙げている。

g. Establishing relative clauses 関係節の先行詞

What's wrong with Bill? — *The woman he went out last night was nasty to him.*

h. Associative clauses 属格用法

the author of this book

i. NP complements 名詞の補部

the fact that I am going to retire

j. Nominal modifiers 名詞の同格

the color red, the name Algernon, the number seven, etc.

k. Unexplanatory modifiers

i) My wife and I share *the same secret*.

ii) *The first person to sail to America was an Icelander.*

g. 以下の特殊な用法を除けば、a.~f.は次のように集約できる。

(I) 照応的用法 (a.)

(II) 現場指示的用法 (b. c.)

(III) 共有知識に基づく用法 (d. e.)

(IV) 連想照応 (f.)

(2) Speakers code a nominal referent as definite when they assume that it is *identifiable* or *accessible* to the hearer. Definiteness is thus profoundly pragmatic affair from the word go, having to do with the speaker's assessment of the hearer's current state of knowledge at a given point in the communication. (...) By 'accessible' one means that the referent is represented in — and can be retrieved from — some pre-existing *mental representation* in the hearer's mind. It is clear now why definite NPs are, in principle, referring, a matter that is taken for granted in assuming their mental accessibility. Existence in the Universe of Discourse, the cornerstone of our approach to reference, is hereby translated, rather elegantly, into existence in some type of mental representation in the speaker's mind. (...)

Definite and/or anaphoric devices most commonly ground referents into three types of mental structure:

(58) Mental structures for anaphoric grounding

a. Mental model of the shared *current-speech-situation*

b. Mental model of permanent *generic-lexical-knowledge*

c. Mental model of the *current text*

(...) A double-grounded referents is accessible partly through an anaphoric connection to its episodic trace in the mental representation of the current text, and partly through a connection to generic-lexical knowledge. Such hybrid grounding is often referred to as frame-based or script-based reference (Anderson, Garrod & Sanford 1983; Yekovich and Walker 1986; Walker

and Yekovich 1987; Schank and Abelson 1977). Typical examples are:

(62) **Double-grounded frame-based reference**

- a. My boy missed *school* today,
he was late for *the bus*.
- b. He showed us this gorgeous *house*,
but *the living room* was too small.
- c. She went into a *restaurant*
and she asked *the waiter* for *the menu*.

(Givón, Talmy, *Syntax. An Introduction*, vol. 1, Benjamins, 2001, 459-461)

話し手は、ある名詞句の指示対象が聞き手にとって「同定可能」であるか、「アクセス可能」であると判断したとき、「定」とコード化する。このように定性は、最初から深く語用論にかかわる事柄であり、コミュニケーションのある時点での、話し手による聞き手の知識状態の査定を必要とする。(…)

「アクセス可能」とは、その名詞句の指示対象が、聞き手の心の中にすでに存在する「心的表示」の中にあるか、またはその心的表示から引き出すことができるということを意味する。このように考えれば、定名詞句がなぜ原則として指示的なのかは明らかだろう。定名詞句の指示対象の心的なアクセス可能性を考慮すれば当然のことである。私の指示理論の要石である「談話世界内の存在」という概念は、話し手の心の中にある心的表示の中の存在というように、きわめてうまく翻訳することができる。

話し手が談話における指示対象を、様々な照応的かつ/または定の文法的手段を用いて定とマークするとき、話し手はその指示対象を聞き手の心の中にすでに存在する心的表示に定位する。(…)

定かつ/または照応的手段は、ふつう次のような 3 つの心的構造に指示対象を定位する。

(58) 照応的定位のための心的構造

- a. 現行の発話の状況の共有された心的モデル
- b. 恒久的な総称的・語彙的知識の心的モデル
- c. 現行のテキストの心的モデル

(…) 2 重の定位を受けた指示対象がアクセス可能なのは、部分的には現行のテキストの心的表示に残されたエピソード的痕跡との照応的繋がりによるものであり、また部分的には総称的・語彙的知識の心的モデルの働きによるものである。このような混合的定位は、過去の研究においては「フレームに基づく指示」とか「スクリプトに基づく指示」などと呼ばれてきた。次が典型的な例である。

(62) 二重に定位されたフレームに基づく構造

- a. うちの子は今日学校に行き損ねた。
バスに乗り遅れたのだ。
- b. 彼は私たちに豪華な家を見せてくれた。
しかし居間が小さすぎた。
- c. 彼女はレストランに入り
ウェイターにメニューを見せてくれと頼んだ。

【解説】

Givón がはっきりと述べているように、ある名詞句に定冠詞が付くのは、その名詞句の指示対象が聞き手にとって「同定可能」「アクセス可能」であるときである。「同定可能」とは、「どれを指しているのかわかる」という意味である。同定可能なのは、指示対象が次のような条件を満たすときである。以下の2つは同値である。

- (i) その名詞句が指しているものが、先行する談話が作り出す談話世界の中にあるか、そこから引き出すことができる。
- (ii) その名詞句が指しているものが、その時点において聞き手の心の中に作り出されている心的表示のなかにあるか、そこから引き出すことができる。

Givón が述べていることは正しいのだが、問題を連想照応に絞って考えたとき、これは連想照応の必要条件であっても十分条件ではない。

4. 連想照応における値踏みの場の連続性

先行する文脈に、照応詞と内在的つながりやフレーム / スクリプト的關係で結ばれた先行詞の候補があったとしても、連想照応は常に可能になるわけではない。フレーム的つながりだけでは十分ではなく、それに加えて満たさなくてはならない条件がある。

- (1) a. Nous arrivâmes dans *un village*. **L'église** se dressait sur une butte. (Charolles 1990)

私たちはとある村に到着した。教会は小高い丘の上に聳えていた。

- b. ??Nous arrivâmes dans *un village*. **L'église** sert d'abri aux habitants en cas d'attaque. (Ibid.)

私たちはとある村に到着した。教会は攻撃を受けた時の避難所の役目を果たしている。

【疑問】

上の例では1つ目の文に先行詞 *un village* があり、2つ目の文に照応詞 *l'église* があって、*un village* — *l'église* というフレーム関係は同じである。それなのに a. では連想照応が成り立ち、b. では成り立たないのはなぜか。

- (2) a. Paul est entré dans *une pièce*. **L'horloge** ne marchait pas.

ポールは部屋に入った。掛け時計は動いていなかった。

- b. Paul est entré dans *une pièce*. **L'horloge** était très grande.

ポールは部屋に入った。掛け時計はとても大きかった。

- c. Paul est entré dans *une pièce*. **L'horloge** était fabriquée en Suisse.

ポールは部屋に入った。掛け時計はスイス製だった。

容認度 $a \geq b > c$

(出口 2016)

【疑問】

上の例でも *une pièce* — *l'horloge* の関係は同じなのに、a. b. c. の順に容認度が下がるのはなぜか。

- (3) 上の (1 b.) の容認度が低い理由を、Charolles は次のように説明している。

Dans (12) [(1 a.)] « l'église » est en effet définie par association non à « un village » tout court

mais à « un village qui est celui dans lequel nous arrivâmes » donc au SN « un village » en tant qu'il est lié aux circonstances d'évaluation que fournit la première phrase. Toute rupture avec ces circonstances d'évaluation comme par exemple dans :

??27 Nous arrivâmes dans un village. L'église sert d'abri aux habitants en cas d'attaque. exclut plus ou moins le défini associatif, la relation sous-jacente à l'anaphore ne pouvant plus fonctionner. (Charolles 1990 : 127)

(12) [= (1a.)]において「教会」は実際のところ、単に「村」にではなく、「私たちが到着した村」との連想関係によって定義されているのだ。言い換えるなら、1つ目の文が作り出す値踏みの場と結びついた「村」である。次の例のように、この値踏みの場と断絶すると連想照応は容認されなくなる。照応の基底にある関係がもはや働かなくなるためである。

(4) 値踏みの場 (circonstance d'évaluation) とは何か

circonstance d'évaluation とは分析哲学者 David Kaplan が次の論文で提唱した概念である。

Kaplan, D., "On the logic of demonstratives", *Journal of Philosophical Logic* 8-1, 81-98, 1979. 正しくは、circumstance and time of evaluation 「値踏みの場と時点」という。

この概念をめぐる哲学的議論は複雑なので、次のように単純化して考えておく。

「値踏みの場」とは、命題の真偽が決定され、命題に含まれた指示詞などの指示対象が決定される局所的な時空間である。

次の例で考えてみよう。話し手は 2019 年 3 月 1 日の午後 4 時 12 分に、阪急電車西宮北口駅のホームで梅田行きの特急列車を待っている。

a. ここは寒い。 / Il fait froid ici.

指示詞「ここ」/ *ici* は、その言語的意味特性として「発話時点で話し手のいる場所」を指す。「ここ」の指示対象が決定されるのは、その時点で話し手がいる「阪急電車西宮北口駅のホーム」という局所的空間である。また「X は寒い」という命題が成り立つのも同じ時空間である。もし話し手が駅中の喫茶店に移動したら、「ここ」という場所も変わり、「X は寒い」という命題も成り立たなくなってしまう。「ここ」が指す場所が決定され、「X は寒い」という命題が真である局所的時空間、つまり「2019 年 3 月 1 日午後 4 時 12 分の阪急電車西宮北口駅のホーム」がこの命題の値踏みの場である。

【解説】

では値踏みの場という概念を用いて次の例の容認度がなぜ低いかを説明しよう。

??Nous arrivâmes dans *un village*. L'église sert d'abri aux habitants en cas d'attaque.

私たちはとある村に到着した。教会は攻撃を受けた時の避難所の役目を果たしている。

第 1 文の動詞の時制は単純過去形で、その命題が解釈される値踏みの場は次の時空間である。 t_0 は発話時現在。

circumstance of evaluation [S1] : time ($t_1 < t_0$), place (un village)

第 2 文の場所は第 1 文と同じ *un village* だと考えられるが、動詞の時制は超時的現在で、時間に関係なく成り立つことを述べている。したがって第 2 文の値踏みの場は次のように書

くことができる。

circumstance of evaluation [S2] : time (timeless), place (un village)

S1 と S2 の値踏みの方は異なっていて、両者の間に談話的断絶がある。連想照応が可能な次の例と比較せよ。

Nous arrivâmes dans *un village*. **L'église se dressait sur une butte.** (Charolles 1990)

私たちはとある村に到着した。教会は小高い丘の上に聳えていた。

circumstance of evaluation [S1] : time ($t_1 < t_0$), place (un village)

circumstance of evaluation [S2] : time ($t_2 = t_1$), place (un village)

この例では S1 は単純過去形、S2 はそれと同時に性を表す半過去形に置かれているので、S1 と S2 の値踏みの方は同一であり、両者は連続している。

ここから次のような仮説を考えることができる。

連想照応が可能となる条件（仮説）

連想照応が成り立つためには、S1 の先行詞と S2 の照応詞の間にフレーム / スクリプト関係があり、かつ、S1 の値踏みの方と S2 の値踏みの方が談話的に断絶せず、連続していなくてはならない。

1.8.節で見たように、連想照応の実例では、S1 が単純過去形や複合過去形で出来事を表し、S2 が半過去形で状態を表すという例が圧倒的に多い。S2 に半過去形が好まれるのは、半過去形が同時に性を表し、値踏みの方の連続性を担保するからである。また次の例のように、S2 が半過去形ではなく単純過去形に置かれている例でも、a.では[レストランに入る] → [定食を注文する] → [ウェイターに断られる] という一連の出来事を述べており、「ある日のレストランでの出来事」という単一の値踏みの方を共有している。また b.でも同じように、[街路樹に衝突する] → [車から投げ出される] という一連の出来事は連続していて、「ある日ある場所で起きた交通事故」という値踏みの方を共有している。

a. Nous entrâmes dans *un restaurant*. Le garçon refusa de nous servir **le menu**.

私たちはレストランに入った。給仕は定食を出すのを断った。 (Kleiber 2001)

b. *La voiture dérapa et s'écrasa contre un platane*. **Le conducteur fut éjecté.** (Ibid.)

車はスリップしてプラタナスにぶつかった。ドライバーは車の外に投げ出された。

(5) 実は値踏みの方の連続性は、連想照応に限ったことではなく、より広く *un garçon* → *le garçon* のような le N による忠実照応でも必要な条件である。Kleiber は le N を ce N と比較した以下の例について次のように述べている。

(6) *Un avion s'est écrasé hier*. *L'avion venait de Miami*.

昨日飛行機が墜落した。飛行機はマイアミ発だった。

(13) ? *Un avion s'est écrasé hier*. *Cet avion venait de Miami*.

昨日飛行機が墜落した。その飛行機はマイアミ発だった。

(14) a. ? *Un avion s'est écrasé hier*. *L'avion relie habituellement Miami à New York*.

昨日飛行機が墜落した。飛行機はマイアミとニューヨークを結ぶ定期便である。

b. Un avion s'est écrasé hier. Cet avion relie habituellement Miami à New York.

昨日飛行機が墜落した。その飛行機はマイアミとニューヨークを結ぶ定期便である。

(a) En reprise immédiate, l'article défini *le* met en jeu fondamentalement les circonstances d'évaluation : le référent est saisi indirectement dans une circonstance d'évaluation constituée par la phrase introductrice du SN indéfini *Un Ni*, que nous noterons désormais p1.

(b) En reprise immédiate, l'adjectif démonstratif *ce* met en jeu le contexte d'énonciation spatio-temporellement limité de sa propre occurrence. Il renvoie directement, c'est-à-dire abstraction faite de toute circonstance d'évaluation, au référent introduit par SN indéfini *Un Ni* de p1 en l'appréhendant comme un objet non nommé qui se trouve reclassifié par la structure attributive classificatoire présupposée *Ce + est un Ni*. (p. 56)

(Kleiber, G., "Pour une explication du paradoxe de la reprise immédiate", *Langue française* 72, 54-79)

(a) 直後の受け直しにおいて、定冠詞 *le* は基本的に値踏みの場合を発動させる。指示対象は、不定名詞句 *Un Ni* を導入する文が作り出す値踏みの場合を通して、間接的に捉えられる。不定名詞句 *Un Ni* を導入する文を以後 p1 と呼ぶ。

(b) 直後の受け直しにおいて指示形容詞 *ce* は、それをを用いることにより時空間を狭められた発話文脈を発動させる。指示形容詞はいかなる値踏みの場合とも無関係に、p1 の不定名詞句 *Un Ni* が導入する指示対象を直接に指す。そしてその指示対象を名前のない対象として把握し、〈*Ce + est un Ni*〉という前提された属詞構造によって再分類する。

【解説】

Kleiber の言うことをまとめると次のようになる。

(I) *le N* は値踏みの場合を通した間接指示

(II) *ce N* は発話文脈に基づく直接指示

次の例を用いて説明しよう。

a. [指差しながら] *Tu peux me passer ce tournevis ?*

そのドライバーを取ってこないか。

このとき *ce tournevis* 「そのドライバー」という名詞句の指示対象は、話し手の指差し行為によって決定される。話し手がいる時空間や話し手が行う指差し行為など、発話行為に関わるものを Kaplan はまとめて「発話文脈」(context of use)と呼ぶ。たとえばその場に 3 本ドライバーがあるとす。一番右にあるドライバーを指さして *Tu peux me passer ce tournevis ?* と言う時と、一番左にあるドライバーを指さして同じ発話をする時とでは、指示対象は異なる。*ce N* は発話文脈に基づく直接指示とはこのような意味である。

b. [B のいる場所からは作業台の上は見えない]

A : *Sur le tréteau, il y a un marteau, un tournevis et une scie.*

作業台には金槌とドライバーと鋸がある。

B : *Alors, tu peux me passer le tournevis ?*

じゃあ、ドライバーを取ってこないか。

A の発話によって 1 つの値踏み場が形成される。その値踏み場は、「作業台」「金槌」「ドライバー」「鋸」という指示対象を含み、発話時現在という時間を持つ時空間である。次のように表記しよう。

CE(1) : (un tréteau, un marteau, un tourvis, une scie) (to)

B の発話の *le tournevis* はこの値踏み場 CE(1)の中にある *un tournevis* を指す。B がどこにいるか、どちらを向いているかといった発話文脈は *le tournevis* の指示対象の確立に何ら働いていない。B は隣の部屋にいて会話していても、*le tournevis* の指示対象は同一である。かたんに言うと、*le tournevis* は「君が作業台の上にあると言ったドライバー」を指している。*le N* が値踏み場を通した間接指示というのはこのような意味である。

(6) *Un avion s'est écrasé hier. L'avion venait de Miami.*

昨日飛行機が墜落した。飛行機はマイアミ発だった。

(14) a. ? *Un avion s'est écrasé hier. L'avion relie habituellement Miami à New York.*

昨日飛行機が墜落した。飛行機はマイアミとニューヨークを結ぶ定期便である。

話し手と聞き手のいる会話ではなく、語り (*récit / narrative*)においては、先行文脈が作り出す語りの世界が値踏み場である。(6)では S1 が複合過去形、S2 は同時性を表す半過去形になっているので、値踏み場は同一であり連続している。したがって、*l'avion* は S1 の値踏み場を通した間接指示となり、「昨日墜落した飛行機」を指す適切な表現である。

一方、(14 a.)では、S2 は習慣的事柄を表す現在時制に置かれているため、S1 と S2 の値踏み場は断絶している。このため *l'avion* は容認度が下がる。

(14) b. *Un avion s'est écrasé hier. Cet avion relie habituellement Miami à New York.*

昨日飛行機が墜落した。その飛行機はマイアミとニューヨークを結ぶ定期便である。

(13) ? *Un avion s'est écrasé hier. Cet avion venait de Miami.*

昨日飛行機が墜落した。その飛行機はマイアミ発だった。

(14 b.)のように、S1 と S2 の値踏み場が断絶しているときは、*le N* ではなく *ce N* が適切になる。値踏み場を通して間接的に指示することができないときは、発話文脈に基づいて直接的に指示するしかない。会話では発話文脈は、話し手のいる時空間と指差し行為だが、語りには明示的な話し手はいないため、これらは利用することができない。語りにおける発話文脈とは、**テキスト上の近接性**である。テキスト上の近接性は、会話における直示がテキスト上に投影されたものと考えることができる。

(13)のように値踏み場が連続しているときは、*le N* を用いた間接指示で十分なので、ことさら *ce N* を用いて直接指示するのは過剰であるため、容認度が下がる。

(6) 連想照応の照応詞に *ce N* が使えないのはなぜか

a. *Nous arrivâmes dans un village. L'église se dressait sur une butte.* (Charolles 1990)

私たちはとある村に到着した。教会は小高い丘の上に聳えていた。

b. **Nous arrivâmes dans un village. Cette église était située sur une hauteur.* (Ibid.)

私たちはとある村に到着した。その教会は小高い丘の上にあった。

Pour les démonstratifs, leur emploi implique un détachement des circonstances dans lesquelles le SN potentiellement source et introduit (cf. Kleiber 1986, 1988c, 1990b et à par.) et, permet conséquemment, une réévaluation ou reclassification de cette source potentielle (cf. Corblin 1987, 3.4. ci-après), de sorte que l'on comprend qu'ils ne puissent se prêter aux usages associatifs dans lesquels la connexion avec les circonstances d'évaluation (avec le cotexte d'occurrence) demeure toujours très étroite. (Charolles 1990 : 127)

指示詞の使用は、先行詞となる可能性のある名詞句が導入された値踏みの場からの離脱を意味する。その結果、指示詞を用いると先行詞となる可能性のある名詞句を再評価し再分類することが可能になる。したがって指示詞がなぜ連想照応で用いることかできないかがわかるだろう。連想照応では値踏みの場（指示詞が使用された文の先行文脈）とのつながりが極めて密接に保たれているからである。

5. 値踏みの場から談話世界へ

(1) 談話・認知論者 (discursivo-cognitif 派) のなかには、指示形容詞付き名詞句 *ce N* は連想照応に用いることができると主張する人がいる。これはどのように説明できるだろうか。

a. Il est vrai que lorsque nous lisons, nous ne pensons pas que **cette histoire** est en train de vivre, de prendre forme grâce à nous. (Reichler-Béguelin 1989)

確かに私たちは本を読む時、この物語は私たちのおかげで生き生きと脈動し、形をなすのだとは思わないものだ。

ここでは私たちの読書の場面が取り上げられている。*cette histoire* 「この物語」はその時手に取って読んでいる本の物語であり、文脈 *lorsque nous lisons* によって作り上げられた談話世界の中の現場指示である。De Mulder (1998)は別の例について、指示詞が談話世界の中で現場指示的に働くことがあることを指摘している。

Il n'empêche que les déictiques peuvent dans ce cas fonctionner comme des instructions à reconstruire une situation énonciative fictive. (p. 21)

(De Mulder, W., "Du sens des démonstratifs à la construction d'univers", *Langue française* 120, 21-32, 1998)

それでも指示詞はこのような場合、想像上の発話状況を再構築せよという指令として働くことがある。

(2) *ce N* は自由間接話法のマークとなることがある

Il allait ... fumer une cigarette dont il tendait l'extrémité allumée vers le ciel, exprès, au passage des escadrilles d'avions, insultant à voix haute **ces pilotes invisibles** avec les plus ignobles gros mots du vocabulaire romain, et concluant "Et maintenant, tire ! bombarde-moi, allez, quoi, tire ! (E. Morante, *La Storia*, p. 131)

La description *ces pilotes invisibles* ne peut être prise pour un anaphorisant d'*avions* ou d'*escadrilles d'avions*, même si, (...) on comprend qu'il s'agit des pilotes des avions qui survolent le fumeur. Le démonstratif marque, au contraire, l'instauration d'un passage au

discours indirect libre, cette configuration discursive particulière où le locuteur se confond avec un énonciateur dont il évoque la pensée, le sentiment, ou le dire comme s'ils étaient les siens propres. Le discours indirect libre repose sur la reconnaissance d'une discordance, produite ici, (...) par le démonstratif.

(Kleiber, G., "Sur l'anaphore associative : article défini et adjectif démonstratif", *Rivista di Linguistica* 2-1, 156-175, 1990)

彼は…煙草を吸おうとしていた。火の付いた先端をわざと空に向けて、飛行機の編隊を指し、あの見えないパイロットたちをフランス語の最も汚い言葉でののしり、吐き捨てるように言った。「ほら、撃てよ。俺を爆撃しろ。さあ、どうした、撃てよ」

「あの見えないパイロットたち」という名詞句は、たとえそれが煙草を吸っている人物の上を飛ぶ飛行機のパイロットであることが明らかであったとしても、「飛行機」や「飛行機の編隊」を照応していると見なすことはできない。逆に指示形容詞はここでは自由間接話法への移行をマークする働きがある。自由間接話法とは、語り手が作中の発話主体と一体化し、その人物の思考や感情や発言を、あたかも自分自身のものであるかのように表現する特殊な談話モードである。自由間接話法はここでは、指示形容詞が生み出す不協和音に気づくことで立ち上げられる。

(3) 自由間接話法 (style indirect libre) とは何か

a. 直接話法 Hélène a dit : « Je vais à Venise demain. »

「私は明日ヴェネチアに行きます」とエレーヌは言った。

b. 間接話法 Hélène a dit qu'elle allait à Venise le lendemain.

翌日ヴェネチアに行くとエレーヌは言った。

直接話法を間接話法に書き換えるとき、①人称 (Je→elle) ②時制 (vais→allait) ③時・場所の副詞句 (demain→le lendemain) ④疑問文や感嘆文 に変更を加えなくてはならない。

自由間接話法とは、Hélène a dit...のような導入節を省略して、まるで地の文のような体裁を取って、①②は通常の間接話法のように書き換え、③④を直接話法のまま残しておく混合型の話法で、小説などにおいて用いられる。

c. 自由間接話法の例

— Mais, hier, mon cœur débordait.

— Nous ne devons plus songer à ce moment-là, mon ami !

Cependant, où serait le mal quand deux pauvres êtres confondaient leur tristesse ?

— Car vous n'êtes pas heureuse non plus ! (Flaubert, *L'Éducation sentimentale*)

「昨日、私の胸は張り裂けそうでした」

「もうあの時のことは考えてはいけません」

しかし二人の哀れな人間が悲しみを共にしてどこが悪いのだろう。

「あなたも幸せではないのですから」

自由間接話法のなかには、登場人物の内言や思考だけでなく、登場人物の知覚を表すものもあるとされている。

Jean regarda dans la chambre par la fenêtre. *Les murs étaient couverts de tableaux. Il y avait*

un lustre au plafond.

ジャンは窓から部屋のなかを見た。壁は絵に覆われていた。天井にはシャンデリアがあった。

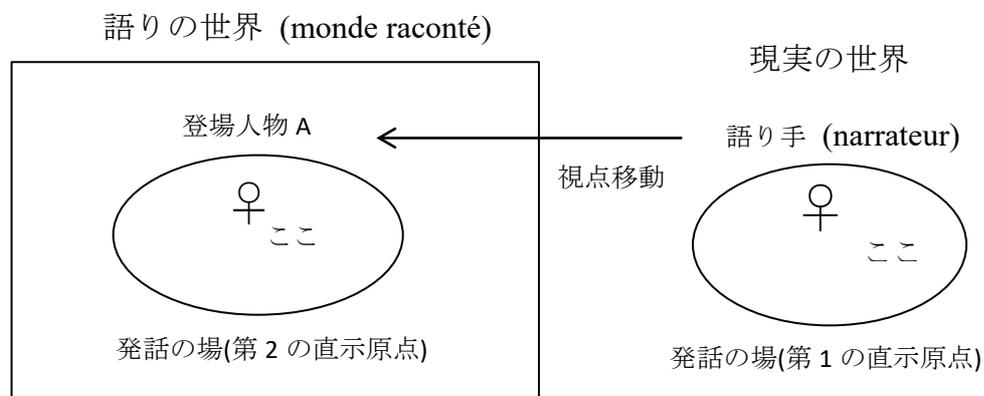
(平塚徹編『自由間接話法とは何か』 ひつじ書房、2017)

(4) Kleiber の言うことが正しければ、(2)の *ces pilotes invisibles* は連想照応ではなく、煙草を吸っている登場人物を中心として語りの世界の中に開かれた擬似的な発話の場を基盤として、「あの見えないパイロットの奴ら」のように現場指示的に用いられた指示詞であるということになる。

これは間接話法の分析にも必要な「直示原点の移動」(deictic center shift) が、語りのテクストの中で起きていることを意味する。直示原点の移動は、日本語の指示詞コ・ソ・アにも起きることが知られている。「視点遊離のコ」と呼ばれる用法である。

- a. 畏友深代淳郎の走り書きのカードも出てきた。そういうものを伝統と称するならば、これはうかつには捨てられないと思った。(朝日新聞「天声人語」)
- b. うとうとして目が覚めると女は何時の間にか、隣の爺さんと話を始めている。この爺さんは慥(たし)かに前の駅から乗った田舎者である。(夏目漱石『三四郎』)
- c. 章子は身籠もっていることに気づいたとき、こんな狭いアパートの一室で赤ん坊を育てることは不安だったが、赤ん坊がいればこの孤独から救われるだろうと思った。それに桂策も少しは家庭を大事にする気になるかもしれない。

(津村節子『重い歲月』)



上の例 a. は次のようにカギ括弧に括って、直接話法にしてもよい例である。

a'. 「これはうかつには捨てられない」と思った。

この天声人語の文章の筆者は、亡くなった深代淳郎のデスクを整理していた時に見つけたメモを現場指示的に「これ」と指している。このとき語り手 (=天声人語の筆者) は、デスクを整理していた時に想像上でワープし (=語りの世界に入り)、登場人物 A の立場に立って、第 2 の直示原点を利用して「これ」と述べている。

また例 b. は自由間接話法である。登場人物の三四郎に視点を移動して、電車に乗っている三四郎の直示原点から「この爺さん」と直示的に指示している。

(5) このように語りでは、語りが作り出す談話世界 (*monde raconté*) が指示表現の談話資源

として用いられることがわかる。では自由間接話法などの文体的操作によって、談話世界の中に一時的に視点が移動することと連想照応の可否にはどのような関係があるだろうか。

談話世界がはっきりと構築されているかどうかによって、連想照応の可否が左右されることがある。

次の例 a.の示すように、ふつうは人間と衣類の間では連想照応はできない。ところが b. c. のようにすると容認されるようになることが指摘されている。

a. **Les enfants sont rentrés. Les souliers sont pleins de boue.* (Fradin 1984)

子供達は帰宅している。靴は泥だらけだ。

b. *Tiens ! les enfants sont rentrés. Les souliers sont pleins de boue.* (Ibid.)

おや、子供達は帰宅している。靴は泥だらけだ。

c. *Les enfants sont rentrés : j'ai vu les souliers sous le banc.* (Ibid.)

子供たちは帰宅している。ベンチの下に靴が見えた。

b.では感嘆詞の使用が、c.では知覚動詞 *voir* の使用が容認度を上げている。Fradin (1984)はその理由を、先行詞と照応詞の間の因果関係が感じられるからとしている。

En fait la phrase (19a), ou des phrases voisines comme (a) et (b), devient acceptable si l'on décèle un lien de 'cause/conséquence' entre leurs deux parties, les souliers s'interprétant, par exemple, comme un indice du retour des enfants. (Fradin 1984, p. 363 note 16)

実は (19a) [上の a.] や(a) [上の b.] (b) [上の c.] のような似通った文は、たとえば靴が子供たちの帰宅のサインとなるというように、先行詞と照応詞の間に「原因/結果」の関係を認めることができれば容認可能となる。

しかし b. c. の容認度がよくなる理由は、談話世界の構築によってより説得的に説明することができる。出口 (2016)は次のように述べている。

このことに関して、Fradin は感嘆詞の使用が文脈の結びつきを強めると説明しているが、本稿ではその具体的な効果は、文における語り手の存在が大きく浮かび上がると考えるのが妥当ではないかと考える。つまり、内的焦点化が起こっていることを明確に示す役割があると考え。その結果、照応詞を含む文は、語り手の視点を通して見られた場景を描写したものとして理解され、例文を語られたもの、文学的表現として、小説の一場面の場景描写であるように読み手に強く認識させるのである。(出口 2016: 70)

これは連想照応の例文について、「小説の一節だと考えると OK だ」と答えるインフォーマントがいることと符合する。語りの談話世界が十分に構築されていて、登場人物や不可視の語り手への内的焦点化 (=談話内世界への視点移動) が自然に感じられるような言語環境が整っているとき、連想照応はうまく働き、ふつうは容認されない連想照応も可能になるのである。

(6) 内的焦点化 (focalisation interne)とは何か

Cette réduction admise, le consensus s'établit sans grande difficulté sur une typologie à trois termes, dont le premier correspond à ce que la critique anglo-saxonne nomme le récit à narrateur omniscient et Pouillon « vision par derrière », et que Todorov symbolise par la formule Narrateur > Personnage (où le narrateur en sait plus que le personnage) ; dans le second, Narrateur = Personnage (le narrateur ne dit que ce que sait tel personnage) : c'est le récit à « point de vue » selon Lubbock ou à « champ restreint » selon Blin, la « vision avec » selon Pouillon ; dans le troisième, Narrateur < Personnage (le narrateur en dit moins que n'en sait le personnage) : c'est le récit « objectif » ou « behaviouriste », que Pouillon nomme « vision du dehors ». Pour éviter ce que les termes de *vision*, de *champ* et de *point de vue* ont de trop spécifiquement visuel, je reprendrai ici le terme un peu plus abstrait de focalisation, qui répond d'ailleurs à l'expression du Brooks et Warren : « focus of narration ».

Nous rebaptiserons donc le premier type, celui que représente en général le récit classique, récit *non-focalisé*, ou à *focalisation zéro*. Le second sera le récit à focalisation interne, qu'elle soit fixe (...) ou variable, (...) ou multiple. (...) Notre troisième type sera le récit à focalisation externe, popularisé entre les deux guerres par les romans de Dashiell Hammet, où le héros agit devant nous sans que nous soyons jamais admis à connaître ses pensées ou sentiments, et par certaines nouvelles d'Hemingway, comme *The Killers* ou davantage encore *Hills Like white Elephants* (...)

(Genette, G., *Figures III*, Seuil, 1972)

このように問題を絞ることを認めてもらえるなら、以下に提出する三項からなる類型論について合意が得られるのも、さして困難なことではあるまい。その第一項は、アングロ=サクソン系の批評において全知の語り手による物語言説と呼ばれているものに一致する。プイヨンが「背後からの視像」と呼んでいるのがまさにこれで、トドロフはこれを《語り手>作中人物》という公式で象徴化している（すなわち、語り手は作中人物よりも多くのことを知っている、というかもっと正確には、語り手はどの作中人物が知っているよりも多くのことを語る）。第二の項は《語り手=作中人物》と公式化される（語り手は、ある作中人物が知っていることしか語らない）。ラボックのいう「視点」を持った物語言説、あるいはブランのいう「視野を制限された」物語言説というのがこれに相当し、プイヨンはこれを「ともにある視像」と呼んでいる。第三の項は《語り手<作中人物》という公式になる（語り手は作中人物が知っていることよりも少なくしか語らない）。これは「客観的」まもしくは「行動主義的」な物語言説のことで、プイヨンの言う「外部からの視像」に相当する。さて、視像とか視野とか視点といった術語には、あまりにも固有に視覚的なものがまわりついているので、そうした視覚性を払拭すべく、私としては本書において、焦点化というさらに抽象度の高い術語を採用することにしよう。なおこの術語はブルックスとウォーレンの用いた「語りの焦点」という表現に符合するものである。

そういうわけでわれわれは、第一のタイプ、つまり一般的には古典的な物語言説によって代表されるようなタイプを、非焦点化の物語言説、もしくは焦点化ゼロの物語言説と呼びなおすことにしよう。第二のタイプは、内的焦点化の物語言説ということになる。この第二のタイプはさらに三つに分かれるのだが、その第一は内的固定焦点化である。（…）第二の内的焦点化は、内的不定焦点化である。（…）第三の内的焦点化は、内的多元焦点化である。（…）さて第三のタイプであるが、

これは外的焦点化の物語言説ということになる。この種の技法を両次大戦間に普及させたのはダシール・ハメットの小説で、彼の作品の主人公はたしかにわれわれの眼前で行動するのだけれども、主人公の思考や感情については、われわれは決して知ることができない。同じくこの技法を普及させたものに、ヘミングウェイのいくつかの中編小説があって、たとえば『殺し屋ども』とか、さらに格好な例としては『白象に似たる山々』がある（…）。

（ジェラルド・ジュネット『物語のディスクール 方法論の試み』花輪光他訳、水声社、1985）

(7) 非焦点化（焦点化ゼロ）の物語言説の例

あたりが暗くなる少し前に、ディロンは狭い裏通りから姿を現して、角で足を止めた。みぞれ混じりの雨が、強い風に吹かれて雪のように舞いながら、セヌ川の上を渡ってゆく。一月のパリとはいえ、たいへんに寒い日であった。リーファー・コート、まびさし付きの帽子、ジーンズにブーツという姿のディロンは、川の舂で働く労働者のように見えるが、もちろんそんな人間ではない。

両手で包むようにして煙草に火をつけ、しばらく影の中にたたずんで、丸石を敷いた広場の反対側にある小さなカフェの灯りを眺めていた。やがて煙草を捨て、両手をポケットの奥に深々と突っ込むと、広場を横切り始めた。

カフェの入り口付近の暗がり、二人の男がやってくるディロンをじっと見つめていた。一人がささやいた。「あの男にちがいない」

男が動きかけた。もう一人が引き止めた。「いや、中に入るまで待て」

（ジャック・ヒギンズ『嵐の眼』早川書房）

(8) 内的焦点化の物語言説の例

網をひきはじめた瞬間、コンラッドはそれが死体だとわかった。重さはあるし、網はビーチと外砂州のあいだの大波にもまれて上下しているのだが、両手のなかでびくびくと動く、いつもの感触がなかった。魚が網目にはげしくぶつかる、ある強烈な躍動感が。彼はロロに声をかけなかったが、ちらっと見ると、友人もおなじことを感じているのが見てとれた。

ビーチの四十ヤードほど先にいるロロの視線は、ふたりのあいだの海で小刻みにゆれながら弧を描いている浮子綱（あばづな）に釘づけになっていた。三日月状にかこまれた水域にじっと眼を凝らし、自分の思い違いであることを示すきざしを捜している——うねる波のなかをすばやく動く影、水面が割れる銀色のゆらめきを。

（マーク・ミルズ『アマガンセット』ヴレッジ・ブックス）

(9) 外的焦点化の物語言説の例

エプロ峡谷の向うの山々は長くて白かった。こちら側は日陰もなく、木立もなく、駅が二本の線路のあいだに日を浴びていた。駅の横にぴったりくっついて駅舎が暑そうな影をつくり、酒場の開けはなした入り口には、蠅をふせぐために竹を数珠つなぎにしたカーテンがぶらさがっていた。アメリカ人と連れれの女が、駅舎の外の日陰のテーブルに腰をおろ

した。ひどく暑かった。パルセロナ発の急行は、あと 40 分で着くはずだった。急行は、この接続駅で 2 分間停車し、それからマドリッドへ行くのであった。

「何を飲もうかしら」女がたずねた。帽子をぬいでテーブルの上においた。

「ばかに暑いな」男が言った。

「ビールにしましょうよ」

「ビールを二つ」男がカーテンの奥に声をかけた。

「大きいほうですか」酒場の女が戸口からきいた。

「そう、大きいのを二つ」

酒場の女がコップに入れたビールを二杯とフェルトのコップ敷きを二枚もってきた。フェルトのコップ敷きとビールのコップをテーブルにおいて、男と女を見た。

(E.ヘミングウェイ「白い象のような山々」『女のいない男たち』所収)

(10) 自由間接話法や登場人物の目に映っていることを描写することによって内的焦点化が起きているとき、ふつうは容認されない人体と部位の連想照応の容認度が上がる。

a. *Tiens ! les enfants sont rentrés. Les souliers sont pleins de boue.* (Fradin 1984)

おや、子供達は帰宅している。靴は泥だらけだ。

→ *Tiens !* という間投詞によって登場人物の存在が示されて、以下の部分はその人物の思考・内的独白と理解される。

b. *Les enfants sont rentrés : j'ai vu les souliers sous le banc.* (Ibid.)

子供たちは帰宅している。ベンチの下に靴が見えた。

→ *j'ai vu* という 1 人称代名詞と知覚動詞 *voir* によって、登場人物のその目に映じた視象であることが示される。

c. *Autour de la table, les joueurs s'épiaient. Les mains étaient crispées sur les revolvers.* (Ibid.)

テーブルの回りではプレイヤーたちがお互いの様子をうかがっていた。手は拳銃にかかってぴくぴくと震えていた。

→ *s'épier* という知覚動詞によって、プレイヤーが見た映像として理解される。

d. *Les coureurs redoublent d'effort. On voit les muscles saillir sous les maillots.* (Ibid.)

ランナーたちはスパートする。シャツの下で筋肉が盛り上がっているのが見える。

→ *On voit* という知覚動詞によって、目に映る情景として理解される

【疑問】

上の例のように内的焦点化によって物語世界に視点移動が起きているとき、直示中心 (deictic center) もまた物語世界の中に移動して、その世界の中に擬似的に第 2 の発話の場 (situation d'énonciation) が形成されている。物語世界の登場人物が *Les souliers sont pleins de boue*. 「靴が泥だらけだ」と定冠詞を用いるとき、*les souliers* はその場に存在し、登場人物が見ている靴を指しているのだから、これは先行詞 *les enfants* との連想照応なのではなく、定冠詞の現場指示的用法 (直示的用法) なのではないだろうか。

(11) 定冠詞の現場指示的用法 (外界照応 *exophre*)

この用法は、**the**+名詞の指示物を同定すべき話者、聴者共有の知識集合が、言語文脈によってではなく、発話の場面、周囲の状況、そして、話者、聴者を取り巻く社会的文化的政治的環境によって形成されている場合である。

(池内正幸『名詞句の限定表現』新英文法選書第 6 巻、大修館書店、1985)

- a. Pass me *the book*. その本を取ってくれ。(池内, *op. cit.*)
- b. Don't go in there, chum. *The dog will bite you*. そこに入るな。犬に噛まれるぞ。(Ibid.)
- c. Beware of *the dog*. 猛犬注意 [張り紙] (Ibid.)
- d. [目の不自由な人に] Harry, mind *the table*. ハリー、テーブルに気を付けて。(Ibid.)
- e. [外にいる警備員に] John, catch *the jailbird*! ジョン、脱獄囚を捕まえて。(Ibid.)

(12) 東郷 (2001) で筆者は、定冠詞の現場指示的用法と呼ばれているものは、実は純粋に現場指示的なのではなく、認知的なフレーム知識と発話現場とが重ね合わされているハイブリッド型の指示であると主張した。たとえば、私が外出の服装をしてスーツケースを手を提げて玄関に立っているとす。玄関にはドアがいくつもある。次のように発話するとき、聞き手はガレージに続くドアや庭に出るドアではなく、外に出る正面玄関を開けるだろう。それは発話現場に「外出」というフレームを重ねて理解しているからである。

- a. Open *the door* for me, please? (Lyons 1999)

すみませんがドアを開けてもらえますか。

同様に、Harry, mind *the table*. とか Harry, mind *the sofa*. とは言えるが、次のように言うのは難しい。それは発話現場である居間に、テーブルやソファはあっても、ふつう消防車はないからである。ここには「居間」というフレームが働いている。

- b. Harry, mind *the fire engine*! ハリー、消防車に気を付けて。

(13) しかし次の例文ではフレームが働いていると言えるだろうか。

- a. *Autour de la table, les joueurs s'épiaient. Les mains étaient crispées sur les revolvers.* (Ibid.)

テーブルの回りではプレイヤーたちがお互いの様子をうかがっていた。手は拳銃にかかってぴくぴくと震えていた。

- b. *Les coureurs redoublent d'effort. On voit les muscles saillir sous les maillots.* (Ibid.)

ランナーたちはスパートする。シャツの下で筋肉が盛り上がっているのが見える。

カードゲームをしているという場面には、「カード」「賭け金」「テーブル」などはフレームの要素として含まれるだろうが、「手」は微妙である。400m レースが喚起するフレームに「筋肉」が含まれているかどうか微妙である。ここではむしろ現場指示的に指示対象が見えていることが重要だと考えられる。

(14) 小田 (2012) では次のように論じられている。

(40) [運転席の男が助手席の妻に]

- a. I'm going to pass {the bus / *a bus}.
- b. Je vais doubler {le bus / ?un bus}.
- c. バスを追い越すよ。

(41) [運転しながら携帯電話で話す男が、通話中の相手に]

- a. Just a second. I'm going to pass {*the bus / a bus}.
- b. Deux secondes. Je vais doubler {??le bus / un bus}.
- c. ちょっと待って。バスを追い越すから。

例 (40) (41)では、「乗車」の認知フレームや「交通状況」の認知フレームなどが想定できる。たとえば「乗車」フレームには「運転手、ハンドル、ハンドルブレーキ、信号、車道」などさまざまな要素があるが、追い越すべき対象としてのバスはこの認知フレームにおけるデフォルト要素ではない。「車に乗れば必ず一台のバスを追い越す」という法則はないからである。このような場合、認知フレームよりも、指示対象であるバスについて知覚を共有していることが意味解釈のフレームの構築を可能にする。(…)そもそも日常生活において何のフレームも見いだせないような場面は少ないと考えられるが、認知フレームと認知フレーム内の要素との関係はさまざまで、定冠詞の使用を無条件に可能にするほどの認知フレームが常に想定できるわけではない。認知フレームの力が弱ければ(あるいは想定される認知フレームと指示対象の結びつきが弱ければ)、指示対象が知覚されているか否かが意味解釈のフレームの構築にとって決定的な要因となる。

(42) [レストランのとあるテーブルを五人の客が囲んでいる。テーブルの上に置かれた誰かの携帯電話が鳴り始める。携帯電話は発話参加者の視界に入っている]

- a. Ah, [the cell phone / *a cell phone] is ringing... Whose is it?
- b. Ah, [le portable / *un portable] sonne... Il est à qui ?
- c. あ、携帯が鳴ってる……誰の携帯？

(小田涼『認知と指示 — 定冠詞の意味論』京都大学学術出版会、2012, pp. 214-215)

(15) まとめ

連想照応の容認度が向上する要因として、Kleiber は「視覚による切り取り」を挙げ、出口は「描写性」を挙げた。その方向性はいずれも正しいのだが、さらに一步踏み込んで、「視覚による切り取りがあつたり、描写性が感じられるとなぜ連想照応の容認度が上がるのか」という疑問に答える必要がある。

この疑問に答えるためには、連想照応を文法のレベルにおいて分析するだけではなく、より広く**談話の構築と理解**という観点から考察しなくてはならない。すなわち、話し手と聞き手の相互行為として言葉が作り出す世界がどのように構築されるか、なかんずく聞き手によってどのように理解され解釈されるかという観点である。

語り (récit) においては、登場人物を中心として物語内に発話の場が作り出される。自由間接話法などによって内的焦点化が起きると、視点がその発話の場へ移動する (deictic center shift)。するとその発話の場を基盤として、その場に存在するものを現場指示的(直示的)に指示することができるようになる。次のような例ではこのメカニズムによって物語内現場指示が起きているのだと考えられる。

- a. Elle jouait du piano dans le salon. **Les doigts** glissaient sur les touches. (出口 2016)

彼女は客間でピアノを弾いていた。指は鍵盤の上をすべるように動いていた。

b. Il s'assit sur le lit et la regarda. **Les paupières** étaient boursouflées et les poches sous **les yeux** striés de veinules bleues. (Roger Vailland, *Les Mauvais coups*, cité dans Kleiber 2001)

彼はベッドに座り彼女を見た。瞼は脹れあがり、目の下の袋には青い縞模様にあった。

6. 連想照応は特殊な照応か：連想照応からふつうの照応へ

(1) 連想照応には枠組の設定と、枠組からの抜き出しという 2 段階の操作がある

Appliqué à « Nous arrivâmes dans un village. L'église ... » cela signifie, qu'au plan de l'interprétation, il y a lieu de distinguer (au moins théoriquement) deux opérations : d'une part la *construction ou position d'un cadre référentiel* (=« un village ») et d'autre part *l'extraction-distinction sur ce cadre d'un élément* (« l'église ») présenté comme une partie ou un ingrédient associé (quelle que soit la « lâcheté » de la relation associative en jeu). (Charolles 1990 : 139)

「私たちはとある村に到着した。教会は…」という例に当てはめると、これが意味するのは、意味解釈にあたっては 2 種類の操作を区別する必要があるということである（少なくとも理論上は）。1 つは「指示の枠組 (=「とある村」) の構築または措定」で、もう 1 つはその枠組から、その一部、または連想関係を持つ素材の要素 (=教会) を「抜き出し区別する」という操作である（そこに働く連想関係がどれほど緩いものであろうとも）。

(2) 連想照応では文脈が重要である

... pour décider s'il y a anaphore de reprise ou associative il ne suffit pas de considérer la seule relation SN1/SN2. Le contexte dans lequel apparaît SN1 joue un rôle essentiel car c'est lui qui va fixer le cadre dans lequel le référent est donné, et c'est en fonction de ce cadre qu'une entité pourra être envisagée comme ontologiquement simple ou complexe, donc comme se prêtant à anaphore de reprise ou à anaphore associative. (Charolles 1990 : 142)

単なる受け直しの照応なのかそれとも連想照応なのかを決定するためには、先行詞と照応詞の関係を見るだけでは不十分である。先行詞が現れる文脈が極めて重要なのだ。なぜなら先行詞の指示対象が与えられる枠組を決定するのは文脈であり、またこの枠組との関係においてある指示対象が存在論的に単純なのか複雑なのかが計られるからである。それによって単なる受け直しの照応なのか、連想照応なのか決まることになる。

【解説】

上の 2 つの引用で Charolles が述べているのは次のことである。

- (A) 連想照応を考えるにあたっては、先行詞 (SN1) と照応詞 (SN2) の間の関係を見るだけでは不十分である。先行詞 (SN1) がどのような文脈に現れ、その文脈がどのような談話世界 (*monde raconté*) を作り上げているかを見なくてはならない。
- (B) 連想照応においては、先行詞 (SN1) とそれが置かれた文脈が作り出す談話世界 (*monde raconté*) が「指示の枠組」(*cadre référentiel*) を形成する。照応詞 (le N) はその枠組の中にある指示対象を指す。

(C) 先行詞と照応詞の連想関係がどれだけ緩くても、照応詞 (*le N*)が指示の枠組の中にあるものを指すことができればそれは連想照応である。

さて、問題は Charolles のように、先行詞と照応詞の間の連想関係 (ステレオタイプ、フレーム) よりも、「指示の枠組の形成」とその中からの「要素の抜き出し」という 2 つの操作を重視すると、連想照応の領土は限りなく拡大し、ふつうの *un N*→*le N* という照応と区別がつかなくなるということにある。

(3) 連想照応ではなく、定名詞句 (*le N*)による指示の意味論について Galmiche が述べていることと比較すると興味深いことがわかる。

Que l'on s'inspire des approches logiques ou que l'on reprenne les descriptions traditionnelles (...) on retrouve un facteur commun : un syntagme défini indique qu'il y a un — et un seul objet — qui correspond à la description utilisée. Soit. Mais quelles sont les conditions qui permettent l'instauration de cette existence-unicité ?

Dans notre perspective, s'il y a *un*, alors il y a *autre(s)* ; autrement dit, pour parler de *l'un*, il faut faire en sorte qu'il ne soit pas *l'autre* ou *les autres*, sinon ni l'« un » ni l'« autre » n'ont pas de sens. C'est ce principe de base qui nous a amené à postuler que c'est l'existence des autres qui fait que *l'un* est un. En d'autres termes, si l'expression « un et un seul » s'impose d'elle-même, elle entraîne nécessairement la question de savoir où et dans quoi. La seule réponse, à ce niveau de généralité, est que cette « unicité » ne peut trouver son « altérité » qu'au sein d'un ensemble. Tout le problème, maintenant, est de savoir sur quelles bases se constituent ces ensembles.

(Galmiche, M., “À propos de la définitude”, *Langue française* 94, 7-37, p. 22)

[定名詞句 *le N* が何を表すかを考察する上で] 論理的アプローチを採用しようと、伝統的記述に頼ろうと、共通する点がある。定名詞句 (*le N*) は、用いられた記述に当てはまる対象が 1 つ、そしてただ 1 つあることを表すという点である。確かにそうだ。しかしこの唯一の存在を確定するための条件は何かという問題が残る。

私の分析においては、「1 つのもの」があるならば「他のもの」がある。言い換えれば「1 つのもの」について語るためには、それが「他のもの」であってはならない。もしそうならば「1 つのもの」も「他のもの」も意味を持たなくなる。この基本原則から、「1 つのもの」が 1 つであるためには他のものの存在が必要になるという結論が導かれる。言い換えれば、「1 つ、そしてただ 1 つ」という言い方が成り立つならば、必然的に「どこに」そして「何の中で」という疑問が生じるのである。この疑問に対するただ 1 つの答は、一般的な分析のレベルでは、この「唯一性」はその「他者性」を 1 つの集合の中にしか見出すことができないということである。ならば問題のすべては、この集合がどのようにして形成されるのかという点に帰着する。

【解説】

Galmiche の論点は 2 つある。第一は *le N* の指示対象の唯一性が成り立つためには他のものの存在が必要だということである。例を挙げて考えよう。「Docteur Lavelle はこの村でただ一人の医者だ」という状況では *le médecin* は Docteur Lavelle を指しており、唯一性が成り立つ。「ただ一人の医者」ということが言えるためには、医者ではない他の村人が必要である。もし村人が Lavelle だけならば、「ただ一人の医者」とは言えない。第二の点は、唯一性には「～の中で」という範囲の指定が必要だということである。上の例では「こ

の村で」が範囲を指定している。したがって、le N の唯一性の基盤は「le N の指示対象以外の他の要素を含む集合」だということになる。Galmiche はこの集合を *ensemble partagé* 「共有集合」、または *ensemble relationnel* 「関係集合」と呼んでいる。

(4) le N による指示には不均質なものの集合が前提となる。

(...) les éléments ou groupes d'éléments de l'ensemble pertinent doivent être d'espèces différentes, puisque la description sélectionne l'(es) élément(s) seul(s) à pouvoir être appelés N, c'est-à-dire seul(s) de son (leur) espèce : c'est le principe d'*hétérogénéité* (ce principe a, entre autres mérites, celui de permettre d'établir une distinction entre la description définie et la description indéfinie, qui exige la saisie d'ensemble *homogène*). La seconde, tout à fait générale, est destinée à transcender la trop grande disparité des modes constitutifs de l'espace ensembliste évoqués précédemment ; elle se résume en un principe simple : tous les ensembles sont de nature associative, i. e. leurs éléments sont rassemblés sur la base d'une propriété d'« agrégat ».

(Galmiche, *op. cit.* p. p. 24-25)

[定名詞句 le N による指示に] 必要な集合の要素は、異なる種類からできているものでなくてはならない。というのは、[le N という] 記述が選び出すのは N と呼ばれうるものだけであり、それはその種類に属するただ 1 つのものでなくてはならないからである。これが「不均質性の原則」である（この原則のよい点は、定名詞句 (le N) と不定名詞句 (un N) をはっきりと区別してくれるという点である。不定名詞句は「均質な」集合を前提とするからである）2 番目の条件は、非常に広い範囲をカバーするもので、先に述べた集合論的空間を形成するやり方が余りに多種多様であるために、それを克服するためのものである。その条件はシンプルに要約できる。[定名詞句 le N による指示に必要な] あらゆる集合は連想的性格を持つ。すなわちその集合の要素は、「雑多なものの集合体」という基盤の上に成立しているのである。

【解説】

前半は「村でただ一人の医者」の例を見ればわかるが、別の例を出してみよう。私のクラスが、フランス人が 12 人、ヴェトナム人が 2 人、日本人（女子）が 1 人からなるとしよう。この状況で学生の 1 人が *Où est passée la Japonaise ?* 「日本人の子はどこに行ったんだ」と言うとき、*la Japonaise* は唯一の日本人学生を指す。この指示が可能なのは、このクラスが「1 人の日本人と、日本以外の国の学生」という集合を形成しているからである。このように le N は不均質な集合（いろいろな種類のものが集まる集合）を前提とする。これに対して un N は「均質な集合」を前提とする。un N と言うときには N であるものが他にもなくてはならない。Galmiche が 2 番目の条件と呼んでいるものは、連想照応と普通の照応 (*un garçon* → *le garçon*) の垣根を取り払うものである。連想照応であれ普通の照応であれ、le N による指示には「不均質な集合」が必要であり、その集合は必然的に連想的性格を持つと述べているのである。

(5) 井元は *un garçon* → *le garçon* のような直後の受け直しには文脈範列体が必要だと主張している。

(4) a. Il y a un dictionnaire sur la table. ??Le dictionnaire est ouvert.

b. Il y a un dictionnaire sur la table. La pièce est sombre. Le dictionnaire est ouvert.

(F. Corblin, “Défini et démonstratif dans la reprise immédiate”, *Le Français moderne* 51, 1983)

筆者は、N を *le N* で取り上げようとする時に、同じ『発話内世界』の中に、他にも言及に値する対象が存在していると感じられるかどうか、ということが N の位置づけが充分かどうかの基準になると考えている。a. では舞台を語っていることがわかれば、照応文のところで *dictionnaire* 以外のものを取り上げる可能性が生じてくるし、b. でも *pièce* に話を進めた時点で、*pièce* にまつわるどんな話が飛び出すかわからなくなる。このように *le N* が生じた所では、常に同じ『発話内世界』の他の要素が指示をうける可能性を持っていることになり、これらの要素と *le N* の指示対象は範列の関係にあると言っていい。この範列は個々の文脈の中で成立する関係だから、筆者は *le N* の指示対象とその文脈における他の潜在的な指示対象からなる集合を *le N* の『文脈範列体』(*paradigm contextuel*)と名付けてみたい。N の指示対象が『発話内世界』の中で位置づけを明確にするということは、それが『文脈範列体』を構築するということである。

(井元秀剛「*le N* と *ce N* による忠実照応」『フランス語学研究』23 号、1989)

(6) まとめ

ここまでの考察を振り返ってまとめてみよう。Charolles は、連想照応では、i) 先行文脈によって「指示の枠組」(*le village où nous arrivâmes*) が設定され、ii) その枠組の中から 1 つの要素 (*l'église*) を取り出すという 2 段階の操作が行われるとした。ところが Galmiche は定名詞句 (*le N*) 一般の指示には、「共有集合」(*ensemble partagé*)または「関係集合」(*ensemble relationnel*) が必要であり、その集合は異なる種類のものによって構成されていなくてはならないとした。Charolles が連想照応について述べていることと、Galmiche が定名詞句一般の指示について述べていることはほぼ同じである。また井元は同一名詞句による忠実照応 (*un dictionnaire*→*le dictionnaire*) が可能となるためには、語りが作り出す世界の中に他の対象が存在する必要があるとして、Galmiche の言う「関係集合」とほぼ同じことを主張している。確かにふつうの照応では同一指示の先行詞があり、連想照応ではそれが無いというちがいはあるものの、*le N* の指示のメカニズム自体は同じだということになる。

(7) テキストが押しつける連想関係

36- Sophie dormait, **le journal** était tombé au pied du lit, **le cendrier** était plein à bord.

(Charolles 1990)

ソフィーは眠っていた。新聞はベッドの足下に落ちており、灰皿は縁まで一杯になっていた。

37- Sophie dormait, **l'avion** survolait l'Océan Indien. (Ibid.)

ソフィーは眠っていた。飛行機はインド洋の上空を飛んでいた。

En vérité, lorsque l'on considère un exemple comme 37, on s'aperçoit que la relation d'association sur laquelle repose l'anaphore définie est complètement induite ou imposée par l'énoncé. Il n'est nullement requis, et rien n'oblige à postuler, qu'elle a ou doit avoir un quelconque caractère stéréotypé. L'interprétant infèrera pour le cas d'espèce, et seulement pour le cas d'espèce,

que « l'avion » a à voir avec le sommeil de Sophie, parce que par exemple elle se trouve dedans.
(Charolles 1990 : 132)

実のところ、37 のような例を見ると、定の照応詞を可能としている連想関係は、完全にこの文から導き出されたものであり、この文が押しつけているものであることがわかる。この関係がステレオタイプの性格を持つ必要はまったくない。解釈する人は、この場合、そしてこの場合に限り、「飛行機」がソフィーの眠りと関係があると推論するのである。たとえばソフィーがその飛行機に搭乗しているという風に。

(8) Charolles による連想照応の定義

dès lors qu'un SN défini est employé anaphoriquement (dès lors que l'on ne peut expliquer sa définitude autrement), s'il n'est pas coréférentiel d'un SN source, on dira qu'il y a anaphore associative. (Charolles 1990 : 130)

ある定名詞句が照応的に用いられているとき（その名詞句が定であることを照応的であるということ以外に説明できないとき）、もし先行詞となるべき同一指示の名詞句が存在しなければ、それは連想照応であると言える。

【解説】

Charolles は上の引用が示しているように、連想照応を広く解釈し、照応的であるという以外に定であることが説明できないときはすべて連想照応であるとする。また連想照応の基盤となるステレオタイプの関係（認知的フレーム）は必ずしも必要なくて、テキストによって押しつけられるとする。つまり先行詞のない定名詞句がいきなり出て来たら、読み手は談話の一貫性を保持するために、その定名詞句はなんらかの関係によって先行文脈と関係すると解釈する。

(9) Marcel Aymé, *Les Contes du chat perché* の最初の La patte du chat の冒頭部分

Le soir, comme ils rentraient ①des champs, ②les parents trouvent ③le chat sur ④la margelle du puits où il était occupé à faire sa toilette.

— Allons, dirent-ils, voilà le chat qui passe sa patte par-dessus son oreille. Il va pleuvoir demain.

En effet, le lendemain, la pluie tomba toute la journée. Il n'avait pas fallu penser à aller aux champs.

夕方になって、②お父さんとお母さんが①畑から戻って来ると、④井戸の縁に③ネコがいるのを見つけました。ネコは身繕いに余念がありません。

「おや、ネコが顔を洗っているよ。きっと明日は雨だね」とお父さんとお母さんは言いました。翌日はその通り一日中雨が降りました。畑に行くどころではありません。

【考察】

① les champs, ② les parents, ③ le chat, ④ la margelle du puits はすべて初出で定である。これらは le soleil のように世界知識による唯一物を指しているのではなく、また現場指示的でもない。照応的に用いられているので定としか解釈できない。Charolles の言うことをそのまま適用すれば、これは連想照応ということになる。読者はテキストが物語の一部で

あることを知っており、*les champs, etc.*が物語が作り出す談話世界の一部であると理解する。